

日本列島中央部における AT下位石器群の 地域化とその背景

ナイフ形石器製作技術および石材利用の分析から

The Regionalization in Production Technique of Backed-knives from
the Central Japanese Archipelago and Their Background

大塚宜明

OTSUKA Yoshiaki

はじめに

- ①日本列島中央部における AT下位石器群研究の現状と課題
- ②分析方法
- ③愛鷹・箱根山麓 AT下位石器群におけるナイフ形石器の種類と組み合わせ
- ④中部高地および関東地方の石器群の概要と編年対比
- ⑤黒耀石利用の変遷と地域間関係の検討
- ⑥日本列島中央部におけるナイフ形石器製作技術の地域化とその背景

【論文要旨】

本論では、日本列島中央部（愛鷹・箱根山麓、関東地方、中部高地）を対象に、ナイフ形石器製作技術と石材の利用状況を検討する。それにより、始良 Tn 火山灰（以下 AT）下位石器群における石器製作技術の地域化のあり方とその背景を明らかにする。

第一に、愛鷹・箱根山麓の AT下位石器群を対象に、ナイフ形石器の技術的特徴に注目し、出土層位を踏まえ4グループに区分した。そして、ナイフ形石器の調整技術とサイズおよび素材構成を観点に整理することで、時間的な4つの段階として捉えた。

第二に、¹⁴C年代および広域テフラとナイフ形石器製作技術を観点に、中部高地と関東地方の石器群を検討し、愛鷹・箱根山麓との編年対比を行なった。以上の検討により、日本列島中央部の AT下位石器群における編年（X～VI層段階）を構築した。その結果、IX層段階は全地域で対比できたものの、X・VII層段階に対比される石器群は中部高地には確認できず、VI層段階の愛鷹・箱根山麓のナイフ形石器製作技術は中部高地と関東地方の両方と異なることが明らかになった。

第三に、日本列島中央部における地域間関係を明らかにするために、黒耀石利用の時期的変遷を検討した。結果、信州産黒耀石の供給地（中部高地）と消費地（関東地方、愛鷹・箱根山麓）という関係性、地域間のつながり、それらとナイフ形石器製作技術の結びつきを確認することができた。

最後に、ナイフ形石器製作技術の変遷と石材利用を総合的に検討した。それにより、列島中央部の AT下位石器群には石材利用の在地化（VII層段階）とナイフ形石器製作技術の地域化（VI層段階）がみとめられ、それらは時期にして一段階分のズレがあることがわかった。そして、この石材利用とナイフ形石器の画期の時間的なズレを、原料の地域化がきっかけとなり、ナイフ形石器製作技術が地域独自化するという列島中央部における石器製作技術の地域化の過程（人類の定着）として位置づけた。

【キーワード】日本列島中央部、AT下位石器群、ナイフ形石器製作技術、石材利用、地域化

はじめに

ナイフ形石器は日本旧石器時代のはじまりを特徴づける石器であり、その形態や製作技術の検討から時期が新しくなるにつれ地域性が明確化することが指摘されて久しい〔安森 1986〕。現在、日本旧石器時代のはじまりについては、立川ローム X 層段階を日本列島における最古の人類の居住とする位置づけ〔小野 2011〕と、古本州島（九州・四国・本州）に到達した現生人類が時間をかけずに古本州島内に拡散したことが示されている〔工藤 2012〕。これらの研究成果を踏まえるならば、従前から指摘されてきたナイフ形石器にみとめられる地域性の顕在化の過程を明らかにすることは、短期間で古本州島に拡散した現生人類が古本州島に定着および住み分けていく過程を示す重要な証拠になると考えられる。

このような研究状況の中、近年、良好な層位的条件をもつ愛鷹・箱根山麓を対象とした調査成果が公表されたことで、日本列島における旧石器時代のはじまりや石器製作技術の地域化について議論する上での基礎資料が充実してきた。それにより、愛鷹・箱根山麓では良好な土層堆積を基準とした編年研究が活発に行われ、日本列島で最も細かなスケールの層位編年が提示され大きな成果をあげている〔笹原 2005, 高尾 2006, 中村 2011a・2012〕。一方で、地域編年の細分化が志向されることで、石器群の変遷の背景や地域間の関係について言及している研究は僅かである。

本論では、上述の愛鷹・箱根山麓に地理的に近接し、かつ黒耀石を利用する点で共通する関東地方と中部高地を加えた日本列島中央部という広域な地域を分析対象に設定し、ナイフ形石器製作技術とその原料である石材の利用状況を検討する。そして、それらの検討結果から、始良 Tn 火山灰（以下 AT）下位石器群における石器製作技術の地域化のあり方をあきらかにすることで、現生人類の定着について考察する。

①……………日本列島中央部におけるAT下位石器群研究の現状と課題

(1) 日本列島中央部における AT 下位石器群の編年研究の歩み

日本列島中央部における AT 下位石器群の編年研究は、1990 年代に関東地方を中心に行われ、周辺地域の編年的位置づけは関東地方の石器群と対比する形で論じられてきた〔石器文化研究会 1991〕。近年、第二東名（新東名）高速道路建設工事に伴う調査の成果と、世界的な現生人類拡散を観点とした旧石器時代初頭への関心の高まりから、より細かな層位的条件をもつ愛鷹・箱根山麓を対象に、編年研究が再び活発になされている〔笹原 2005, 高尾 2006, 中村 2011a・2012〕。

愛鷹・箱根山麓の旧石器時代遺物の包含層は、富士山を主な供給源とする火山噴出物であるスコリア層と土壌化が進んだ黒色帯の互層状の堆積を特徴としている。特に本論で研究対象とする AT 下位では互層状の堆積が頻繁に繰り返されていることを利用し、石器群の出土層位を観点とした細かなスケールでの編年的検討が可能になっている。編年の方法としては、石器群が包含される層位を基準に、石器組成・個別石器の特徴（たとえばナイフ形石器）・剥片剥離技術（特に石刃技法の有

無)などの石器製作技術を中心に、利用石材などの要素の異同が検討され、編年の細分化がおこなわれた。1990年代は、1982年にはじまる愛鷹運動公園遺跡群の調査事例を主な対象に編年案が提示された[笹原 1995, 佐藤 1992, 高尾 1995]。そこでは、「台形様石器」[佐藤 前掲]を主体とし局部磨製石斧を伴う石器群から、石刃製の二側縁加工ナイフ形石器石器群を経て、小形ナイフ形石器石器群へとという石器群変遷の大まかな一致をみた。そして、2000年代、第二東名(新東名)高速道路建設工事に伴う調査の成果を受け、編年の細分化が推し進められ、日本列島で最も細かなスケールの層位編年が構築されたのである(表1)。

表1 愛鷹・箱根山麓 AT下位石器群の編年対比表

	層位	笹原 2005	高尾 2006	中村 2011a	中村 2012	
「台形様石器」石器群	ScIV	元野 第2東名No.25 第2東名No.26	第二東名No.25~27 追平B	富士石 I文 梅ノ木沢 I文	井出丸山 追平B II文1~5ブロック	的場 元野
	BBVI	第2東名No.27 細尾 梅ノ木沢	富士石 中見代 I BBVI	中見代 I BBVI 追平B II文1~5ブロック	富士石 I文 富士石 II文 中見代 I BBVI	中見代 II BBVII 清水柳北中央尾根 BBVI 梅ノ木沢 I文
	BBV	中見代 I BBVI 西洞 BBVI 生茨沢 BBVI直上 清水柳北 BBV 梅ノ木沢 中見代 I BBV 二ツ洞 BBIV	生茨沢 BBVI直上 清水柳北中央尾根 中見代 I BBV 二ツ洞 BBIV 初音ヶ原A第1地点	西洞b区 BBVI直上 梅ノ木沢 II文 生茨沢 BBVI直上 中見代 I BBV 土手上d・e区 BBV 清水柳北東尾根 BBV	西洞b区 BBVI直上 生茨沢 BBVI直上 中見代 I V文 土手上d・e区 BBV	梅ノ木沢 II文 清水柳北東尾根 BBV 初音ヶ原A第1地点 的場 BBV
	BBIV	二ツ洞 BBIV			二ツ洞 BBIV 富士石 V文	佐野片平山B I文 入ノ洞B I文
二側縁加工ナイフ形石器石器群	ScIII	向田A 葛原沢IV 鉄平 中見代 I IV文	向田A 葛原沢IV 中見代 II SCIIIb1 初音ヶ原A第1地点 下原SCIIIb1	向田A 秋葉林 第II文 野台南 I文 富士石 VI文		
	BBIII	中見代 II X III層 柏葉尾 西大曲 BBIII 中見代 I III文	中見代 I BBIII 中見代 II BBIII 柏葉尾BBIII 初音ヶ原A第3地点 初音ヶ原A第2地点 加茂ノ洞B BBIII	中見代 I III文 清水柳北中央尾根 土手上d・e区 上原III文 下ノ久保 I文 初音ヶ原A第1地点 富士石 IX文		
	BBII	初音ヶ原第1 初音ヶ原第3	清水柳北東尾根 BB II 初音ヶ原A第1地点 観音堂G BB II	清水柳北東尾根BB II 西大曲 富士石 X II文 初音ヶ原A第2地点など		
	NL	清水柳北 西願寺B	上原第III文化層 清水柳北東尾根 NL	清水柳北東尾根 NL イタドリA I文 富士石 X III文		

(2) 愛鷹・箱根山麓における AT下位石器群の編年研究の課題

一方で、調査の進展により、「台形様石器」石器群と二側縁加工ナイフ形石器石器群出現後の両者の細分について様々な区分が提示されている。旧石器時代の初期の位置づけにかかわる「台形様石器」を有する石器群(「台形様石器」石器群)については、富士川系のホルンフェルス製の礫器および石核と剥片からなる石器群(ホルンフェルス石器群)との先後関係が議論になっている。それら

の位置づけについては、現在、両者の関係を時期差とする説〔笹原 2005、高尾 2006、中村 2012〕と、⁽¹⁾同時期異相とする説〔中村 2011a〕という対照的な2つの説が提示されている。

また、表1からもあきらかなように、二側縁加工ナイフ形石器出現後の細分も各研究者により3段階区分〔笹原 2005、高尾 2006〕と4段階区分〔中村 2011a〕というように異なる区分がなされている。AT下位石器群における石器製作技術の地域化にかかわるため、それらの時期区分の根拠を詳しくみると、出土層位をSCⅢ層とする石器群では石刃製二側縁加工ナイフ形石器と「弧状一側縁背部加工ナイフ形石器」〔佐藤 1992〕を指標とする点で三者共通する。しかし、BBⅢ層より上層の石器群では様々な見解が提示されている。BBⅢ層の石器群については、笹原芳郎と高尾好之は石刃製二側縁加工ナイフ形石器の小形化を指標とし1つの段階としている。対して、中村はBBⅢ層の石器群について、BBⅢ層下・中部を出土層準とする「弧状一側縁背部加工ナイフ形石器」が特徴的で石刃製作が低調である時期と、BBⅢ層上部～BBⅡ層から出土する基部に抉りのある石刃製二側縁加工ナイフ形石器と横長・幅広剥片素材の小形ナイフ形石器の時期に区分している。そして、最後の時期については、笹原と中村はNL層の石器群を小形の横長・幅広剥片素材のナイフ形石器が特徴となる時期とする。一方、高尾はBBⅡ～NL層を一時期とし、小形化した石刃製ナイフ形石器と横長・幅広剥片素材のナイフ形石器の時期としており区分が異なる。

上にみてきた二側縁加工ナイフ形石器出現後の区分については、以下の問題点を指摘できる。第一に、SCⅢ層石器群の指標とされる「弧状一側縁背部加工ナイフ形石器」についてであるが、後続するBBⅢ層で出土していることが先にとりあげた高尾と中村の論文中で指摘されている。この点を考慮するならば、SCⅢ層とBBⅢ層の石器群を1つの段階としてまとめて理解することもできることになる。第二点目は、BBⅢ層石器群の細分についての問題である。中村は、石刃製ナイフ形石器の多寡を根拠にBBⅢ層石器群の細分をおこなっている。しかし、中村がBBⅢ層下・中部に位置づけた土上遺跡BBⅢには、抉りのある石刃製二側縁加工ナイフ形石器がまとめて出土していることが同論文中で指摘されている。そうすると、BBⅢ層上部～BBⅡ層とした時期と区分する根拠がなくなり、笹原と高尾が指摘するように同時期異相の石器群として理解できることになる。そして、最後に、笹原と中村のようにNL層を独立した非石刃製小形ナイフ形石器の石器群として捉えるか、それとも高尾のようにBBⅡ～NL層を1つのまとまりとし石刃と非石刃製のナイフ形石器を有する石器群として捉えるかという点についても見解が一致していない。

このように様々な編年の細分案が生じる要因としては、特に中村の2011年と2012年の論考における非常に細かな区分案やそれぞれの論文中での編年や位置づけの変更からもあきらかなように、層位的条件が良好な愛鷹・箱根山麓では地域編年の細分化が志向されることで、石器群が有する諸要素（例えばナイフ形石器の形態組成や石材構成など）の微かな差異についても時期差として理解されてしまう可能性がある。つまり、編年細分化の志向の差が時期区分に大きく影響を与えている点を課題として指摘できる。また、非常に細かなスケールの地域編年は、他地域では層位的条件の違いもあり同等のスケールで検討できない〔中村 2012〕。そのため、本論の主題である日本列島中央部における石器製作技術の地域化を検討するためには、関東地方および中部高地との編年対比についても課題を有することになる。

(3) 日本列島中央部における石器製作技術の地域化についての研究の推移と現状

ここでは、日本列島中央部のAT下位石器群を対象とした石器製作技術の地域化に関する研究の推移と現状について、安蒜政雄、佐藤宏之、森先一貴の研究を代表として以下にみていく。

まず、安蒜論文〔前掲〕について該当箇所を記すと、安蒜はAT下位石器群をⅠ期（立川ロームⅩ層～Ⅶ層）とⅡ期（立川ロームⅥ層）の2時期に区分している⁽²⁾。そして、ナイフ形石器製作技術を観点とすることで、Ⅰ期の「杉久保系」ナイフ形石器を特徴とする東北・中央地区の1地域が、Ⅱ期では杉久保系ナイフ形石器（東北地区）と「茂呂系」ナイフ形石器（中央・西南・九州地区）の2地域へと分化することを指摘した。

つづいて佐藤論文〔前掲〕をみる。そこでは、まずⅨ層段階までは列島規模で共通する二極構造がみとめられ、それ以後次第に変容を遂げながらもⅦ層段階まで存続する構造的なことから、「台形様石器」が消滅したⅥ層段階ではナイフ形石器内部の二極的構造に変換するという「後期旧石器時代前半期」の特徴が指摘された。同時に、佐藤は、東北日本と西南日本という巨視的な視点から地域性についても言及している。東北日本はⅦ層段階における「台形様石器」Ⅱ類の発達と一貫した基部加工ナイフ形石器を特徴とするのに対し、本論が対象とする西南日本のⅥ層段階では、ナイフ形石器内部での二極構造（「中型長狭型」二側縁加工ナイフ形石器／「小型」剥片製ナイフ形石器）に変換することが指摘された。

最後に、森先〔2010〕は、前述した佐藤の意見を追認した上で、古本州島西南部（九州地方～関東地方）の地域化について言及している。森先は「Ⅸ層並行期」まで列島規模で共通する二極構造が、「Ⅶ層並行期」ではそれぞれ主体となる器種・型式において、九州地方、近畿・瀬戸内地方、関東・東海地方という地域的な差異を持つことを指摘した。さらに、つづく「Ⅵ層並行期」では「二極構造の一体的な解体と、ナイフ形石器内部での大小二項性の成立」を特徴とする点で共通するものの、「関東地方における大型刺突具の発達と、東海地方以西におけるその発達の弱さ」を指摘している。

以上みてきた研究は論文の発表年の違いもあり、必ずしも同一資料から導き出された見解ではないが、ナイフ形石器や「台形様石器」の製作技術に注目し、AT下位石器群における石器製作技術の地域化の進行を指摘している点で三者共通している。しかし、地域のくくりについては安蒜と佐藤が大きく東北日本と西南日本の2つの地域を指摘するのに対し、森先はさらに西南日本内での地域差も指摘している。特に森先によりⅥ層段階の関東・東海地方について指摘されたナイフ形石器製作技術の地域差は、本論の目的である日本列島中央部における石器製作技術の地域化を考えるうえで重要である。

(4) 研究課題に対する本研究のアプローチ

上に編年研究の歩みと課題および、石器製作技術の地域化に関する研究の現状をみてきた。ここで編年研究と並行して進められてきた石材研究の成果に触れることで、研究課題に対する本研究のアプローチについて示す。愛鷹・箱根山麓では石材研究、その中でも黒耀石産地推定分析が行われ重要な指摘がなされている。代表例として、池谷信之と島田和高の研究を以下に概観する。

池谷は、愛鷹・箱根山麓の旧石器時代から縄文時代草創期の石器群を対象に、黒耀石産地の構成を検討した〔池谷・望月 1998〕⁽³⁾。その結果、第1期では伊豆箱根系と神津島系を主体に少量の信州系が利用され、第2期では伊豆箱根系を主体に信州系が伴うという時期ごとの傾向が指摘された。そして、これらの関係から、遠隔地を含む多方面産地の併存（第1期）から伊豆箱根系主体（第2期）への産地構成の変化をあきらかにした。さらに、池谷〔2009〕は、伊豆箱根系黒耀石を主に利用する第2期において、ナイフ形石器のサイズと「陥穴」の検討を加えることで、「陥穴」とナイフ形石器の小形化との関係性を指摘した。それらの関係から、「陥穴施設に伴う集中的な労働力の投下や、猟期における巡視と回収、メンテナンスという「ヤリ」を用いた狩猟活動には必要とされなかった継続的な生業活動によって、居住地への定着度」の高まりを想定し、当該期に領域圏の確立や地域的な単位化〔佐藤 2002〕を指摘した。

一方、島田〔2009〕は、中部高地に焦点を定め、関東地方や愛鷹・箱根山麓などの周辺地との関係について、Ⅹ・Ⅸ層段階の石器群を対象に検討した。その結果、特に環状ブロックが形成されるⅨ層段階では愛鷹・箱根山麓のみにとどまらず、関東地方・中部高地にまたがる広域的な石材利用のあり方をあきらかにした。

以上みてきたように、黒耀石の利用を観点として列島中央部の関係性が指摘されてはいるものの、上にあげた池谷や島田の研究を除き、あくまで地域編年を区分する上での指標の1つとして扱われているのが現状である〔高尾 2006, 中村 2011a〕。池谷や島田が指摘するような黒耀石の広域利用を考慮するならば、黒耀石の利用状況の比較は、各地の地域間関係をあきらかにする有効な方法といえる。同時に、黒耀石の利用状況から指摘されているような愛鷹・箱根山麓における石材利用の地域化は、AT下位石器群における石器製作技術の地域化を読みとくうえで重要な要素となりうる。

以上の点を踏まえ、本論では、日本列島中央部におけるAT下位石器群の地域化とその背景をあきらかにすることを主題とするため、編年研究の課題でも触れたとおり細別編年のように時期区分に問題点を抱えたまま編年対比を試みるのではなく、まずナイフ形石器製作技術にあらわれたより大きな変化を時間軸とし各地の状況を整理する。そのうえで、黒耀石の利用を観点に各地の関係を検討することで、AT下位石器群における石器製作技術の地域化の背景をあきらかにする。

②……………分析方法

(1) 分析方法

本論では、研究課題を解決するために、4つの手順で検討を行う。

第一に、近年当該期資料の蓄積が著しく編年の細分化が推し進められている愛鷹・箱根山麓のAT下位石器群を対象に検討する。分析方法としては、当該期に普遍的な石器でありその技術的特徴から地域性が指摘されてきたナイフ形石器に注目し、さらに層位的な出土状況を加味してAT下位石器群のグループ化と編年を試みる。第二に、関東地方および中部高地の石器群を対象に、層序・テフラと年代およびナイフ形石器の特徴に注目して愛鷹・箱根山麓で設定された編年対比と比較を行う。第三に、対比された編年にもとづき、広域石材である黒耀石の利用状況の時期的変遷を検討し、

地域間の関係をあきらかにする。最後に、ナイフ形石器製作技術と黒耀石の利用状況を総合的に検討することで、当該期の日本列島中央部における石器製作技術の地域化のあり方とその背景について議論する。

(2) ナイフ形石器の分類

まず、ナイフ形石器を分類し、次章以降で具体的な検討を行う。当該期のナイフ形石器は、素材・加工・形に注目すると、いくつかの類型に整理できる(図1)。まず、その素材に注目することで、縦長剥片⁽⁴⁾を素材とするものと、横長・幅広剥片を素材とするものの二者に大きく区分することができる。

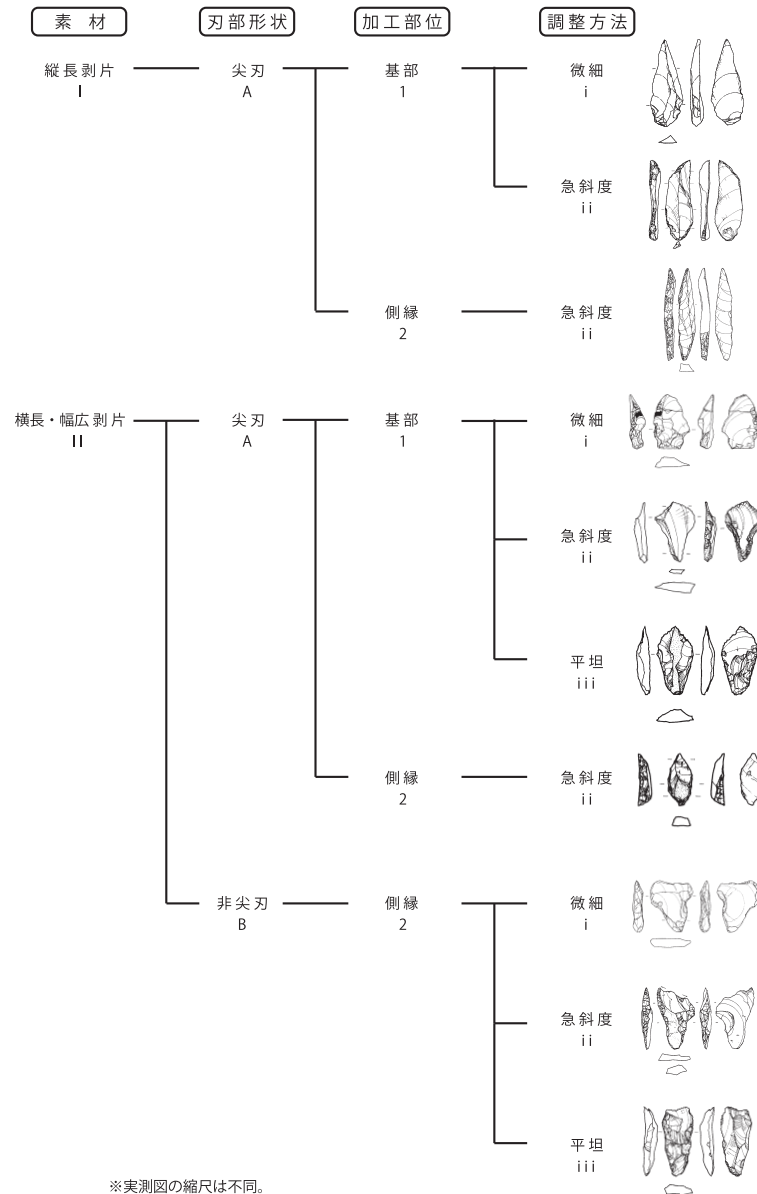


図1 ナイフ形石器の分類

縦長剥片素材のナイフ形石器は、刃部形状が尖刃となる特徴をもつ。加工部位により、基部や先端を加工する基部加工のナイフ形石器（I A-1）と、側縁加工のナイフ形石器（I A-2）に細分される。前者は微細調整によるもの（I A-1i）と急斜度調整によるもの（I A-1ii）があり、後者は急斜度調整による（I A-2ii）。

次に、横長・幅広剥片素材のナイフ形石器をみる。横長・幅広剥片を素材とするものは、尖刃と非尖刃の2つの刃部形状をもつ。尖刃を呈するものは、基部加工（II A-1）と側縁加工（II A-2）がある。施される調整加工は、前者では微細調整（II A-1-i）、急斜度調整（II A-1-ii）、平坦調整（II A-1-iii）の三種があり、後者は急斜度調整（II A-1-ii）のみがみとめられる。非尖刃のものは側縁加工による（II B-2）。施される調整技術の違いにより、微細調整によるもの（II B-2i類）、急斜度調整によるもの（II B-2ii）、平坦調整によるもの（II B-2iii）に細分される。

③……………愛鷹・箱根山麓 AT下位石器群におけるナイフ形石器の類型と組み合わせ

(1) 分析資料

愛鷹・箱根山麓は厚い土層の堆積を特徴としており、石器群の単位が石器包含層を基準に一般的に呼称される。ここで研究対象とする AT下位石器群が包含される土層の堆積を概観し、次に分析対象とする遺跡を記す。

愛鷹ロームは古い方から下部ローム・中部ローム・上部ローム層の順に堆積する。既に触れたように旧石器時代遺物を包含する上部ローム層は、スコリア層と土壌化が進んだ黒色帯の互層状の堆積を特徴とする。上部ローム層の中位に位置するニセ・ローム層と呼ばれる黄褐色スコリア層に AT が包含されていることから、ニセ・ロームより下位が本論の分析対象となる。

ニセ・ローム層下位の地層は、上位からニセ・ローム層（NL：AT 包含層）、第II黒色帯（BB II）、第IIIスコリア層黒色帯1（SC III b1）、第IIIスコリア層スコリア2（SC III s2）、第IIIスコリア層黒色帯2（SC III b2）、第IIIスコリア層スコリア3・4・5（SC III s3～5）、第IV黒色帯（BB IV）、スコリア層、第V黒色帯（BB V）、スコリア層、第VI黒色帯（BB VI）、スコリア層、第VII黒色帯（BB VII）、そして上部ローム層中最下層の第IVスコリア層（SC IV）をへて、以下中部ローム層につづく（図2）。

このように AT下位にみとめられる多数の地層が、研究史でみたように編年の1つの基準とされている。ただし、土層の区分と考古学の区分は目的と性質が異なるため、土層の区分をそのまま考古学上の区分とすることはできない。そのため、本論では石器群の出土層位を考古資料を包含する1つの大まかな単位として用いるのにとどめ、各時期に普遍的にみとめられ技術的な比較検討が可能なナイフ形石器の特徴に基づき考古学的な区分を試みることにする。よって、ナイフ形石器がまとまって出土する遺跡を分析対象として選択した⁽⁵⁾。

分析対象とする石器群は、SC IV～BB VII：井出丸山遺跡第I文化層、BB VII：富士石遺跡第I文化層、BB VI：中見代第I遺跡 BB VI・富士石遺跡第II文化層、BB V：中見代第I遺跡 BB V、BB

IV：二ツ洞遺跡 BB IV, SC III：葛原沢第 I 遺跡 SC III b2・中見代第 I 遺跡 SC III s2 直上・中見代第 II 遺跡 SC III b1～SC III s1, BB III：初音ヶ原 A 遺跡第 2 地点第 III 文化層・清水柳北遺跡中尾根 BB III・中見代第 I 遺跡第 III 文化層, BB II：富士石遺跡第 X II 文化層・初音ヶ原 A 遺跡第 3 地点第 I 文化層・清水柳北遺跡東尾根 BB II, NL：富士石遺跡第 X III 文化層・清水柳北遺跡東尾根 NL である。

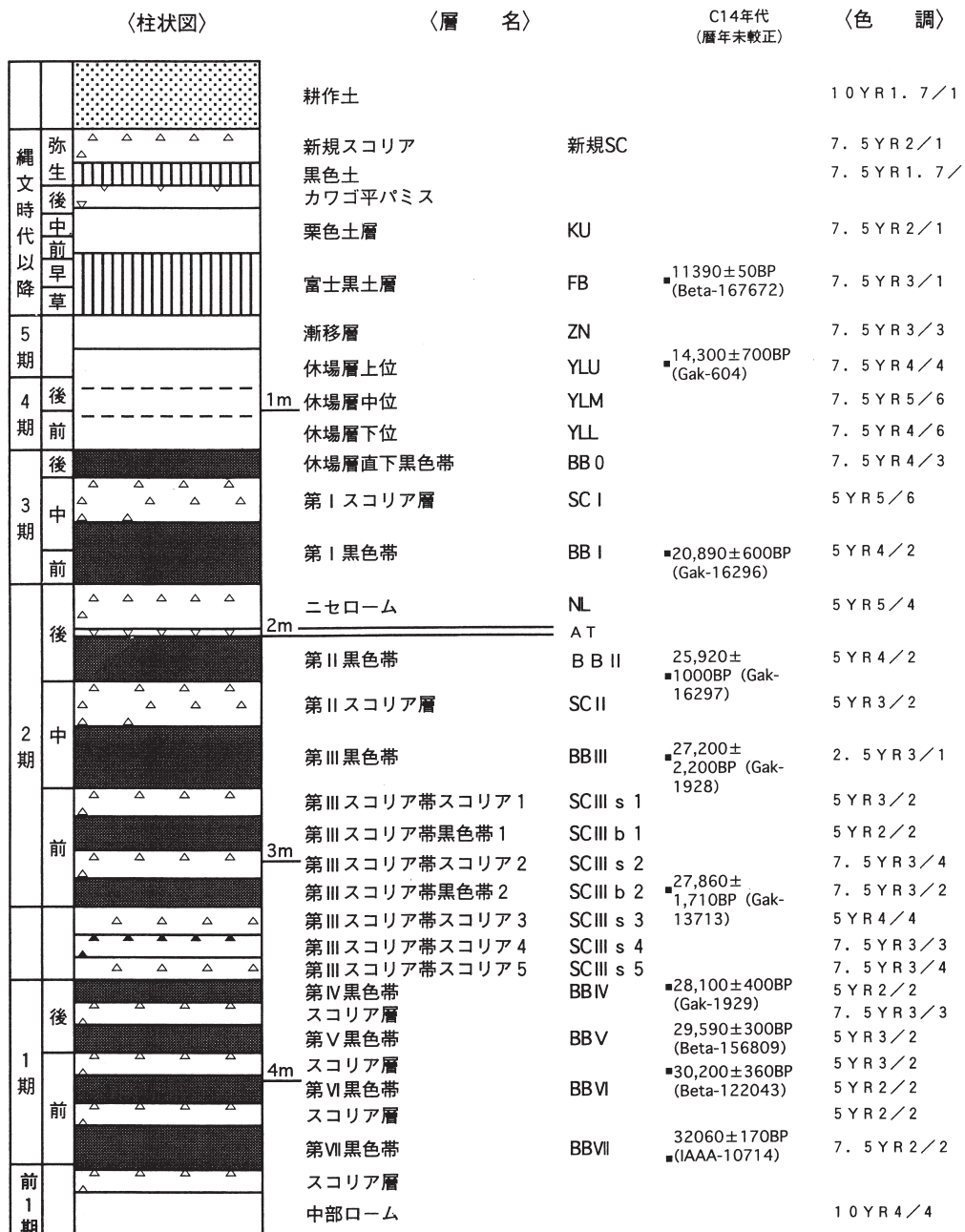


図 2 愛鷹山麓の土層模式図 [高尾 2006]

(2) 石器群のグループ分け

ナイフ形石器の種類の組み合わせに注目することで、4つのグループに区分できる。以下グループごとにみていく。

グループ1

グループ1は、横長・幅広剥片を素材とし、非尖刃の二側縁加工ナイフ形石器と、尖刃の基部加工ナイフ形石器からなる(図3)⁽⁶⁾。それらの整形方法に注目すると、いずれも微細調整によっており、素材形状の修正度が低い点に特徴がある。井出丸山遺跡第I文化層が該当する。石器群の出土層位は、SC IVを主体とする。

グループ2

グループ2のナイフ形石器も、横長・幅広剥片のみを素材とする(図4)。非尖刃の二側縁加工ナイフ形石器がまとまってみられ、それに尖刃のナイフ形石器が伴う。それらの整形方法に注目すると、平坦調整を中心に(1~3・6~14)、急斜度調整(15)、微細調整(4・5・17)があり、多種の調整技術がナイフ形石器の整形に特徴的に用いられている。

富士石遺跡第I文化層、中見代第I遺跡BB VI、富士石遺跡第II文化層、中見代第I遺跡BB V、土手上遺跡BB V、二ツ洞遺跡BB IVが該当する。石器群の出土層位は、BB VII~BB IVである。

グループ3

グループ3は、縦長剥片製のナイフ形石器と、横長・幅広剥片素材のナイフ形石器を有する(図5・6)。縦長剥片を素材とするものは、側縁加工ナイフ形石器を中心に、基部加工ナイフ形石器がある。横長・幅広剥片素材は、側縁を加工した非尖刃と尖刃のナイフ形石器からなる。調整加工は、急斜度調整が全ての類型で共通して用いられている。

また、グループ3のナイフ形石器は、図5と図6からもあきらかなように、縦長剥片素材と横長・幅広剥片素材のナイフ形石器のサイズに違いがある。加えて、前者は在地石材のホルンフェルスを主体とするのに対し、後者は黒耀石を主体としており、目的とするナイフ形石器の製作にあわせた石材の使い分けもみとめられる。

遺跡ごとの類型組成をみると、縦長剥片素材のナイフ形石器を主体とする一群と、横長・幅広剥片素材のナイフ形石器を主体とする一群に分かれてみとめられる傾向がある。前者に該当するものとして、葛原沢第I遺跡SC III b2、中見代第I遺跡SC III s2直上、初音ヶ原A遺跡第2地点第III文化層、初音ヶ原A遺跡第3地点第I文化層がある。後者の例として、中見代第II遺跡SC III b1~SC III s1、清水柳北遺跡中尾根BB III、富士石遺跡第IX文化層、清水柳北遺跡東尾根BB IIがあげられる。このようにナイフ形石器の素材により二分されるが、両者の共伴例(富士石遺跡第XII文化層)の存在や、ナイフ形石器の調整技術の共通性から、同一グループとして扱う。

該当する石器群は、葛原沢第I遺跡SC III b2、中見代第I遺跡SC III s2直上、中見代第II遺跡SC III b1~SC III s1、初音ヶ原A遺跡第2地点第III文化層、清水柳北遺跡中尾根BB III、中見代第I

SCIV~ BBVII

井出丸山 第I文化層

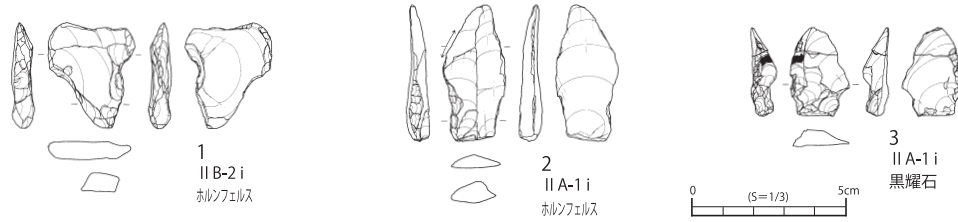
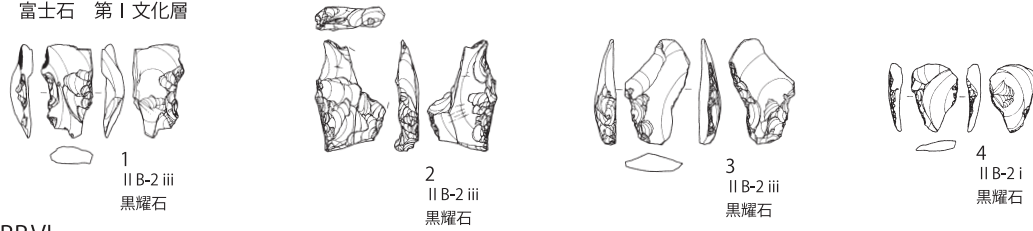


図3 グループ1のナイフ形石器

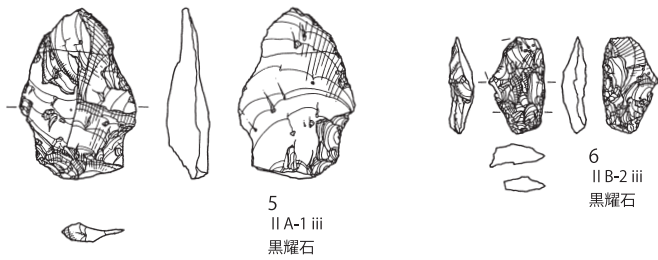
BBVII

富士石 第I文化層

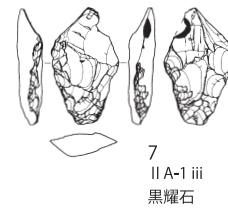


BBVI

中見代 I BBVI

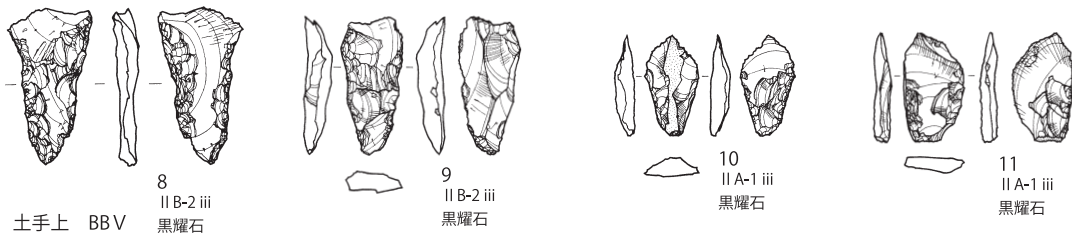


富士石 第II文化層

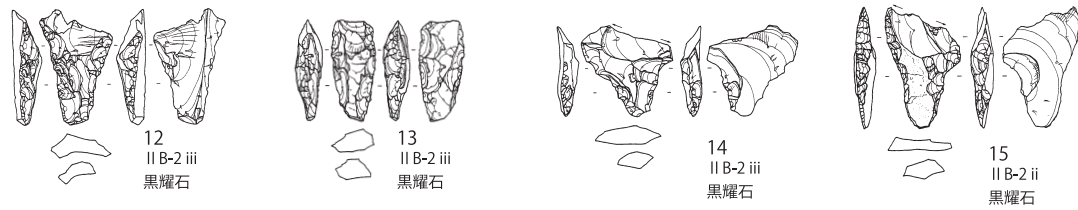


BBV

中見代 I BBV



土手上 BBV



BBIV

ニツ洞 BBIV

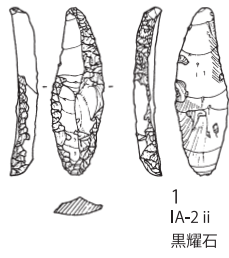


図4 グループ2のナイフ形石器

SC III

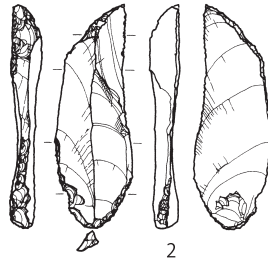
縦長剥片主体

葛原沢第 I SC III b2

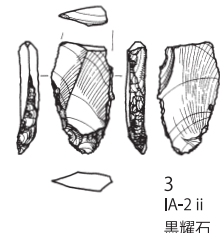


1
IA-2 ii
黒耀石

中見代 I SC III s2 直上



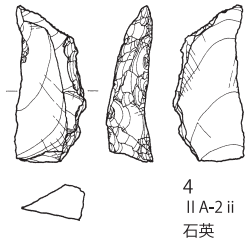
2
IA-1 ii 瑛頭岩



3
IA-2 ii
黒耀石

横長・幅広剥片主体

中見代 II SC III b1 ~ SCs1



4
II A-2 ii
石英



5
II A-2 ii
瑛頭岩



6
II B-2 ii
安山岩



7
II B-2 ii
瑛頭岩

BB III

縦長剥片主体

初音ヶ原 A 第 2 地点 第 III 文



8
IA-2 ii
ホリソフェルス



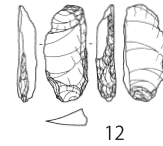
9
IA-2 ii
ホリソフェルス



10
IA-2 ii
ホリソフェルス



11
IA-2 ii
ホリソフェルス



12
IA-2 ii
ホリソフェルス



13
IA-1 ii
ホリソフェルス

横長・幅広剥片主体

清水柳北中尾根 BB III



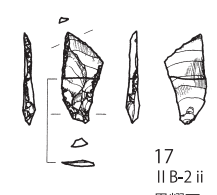
14
II A-2 ii
黒耀石



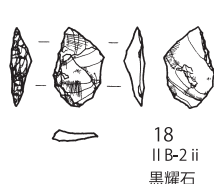
15
II A-2 ii
黒耀石



16
II A-2 ii
黒耀石



17
II B-2 ii
黒耀石

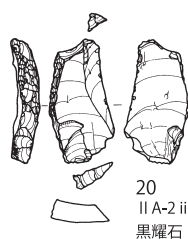


18
II B-2 ii
黒耀石

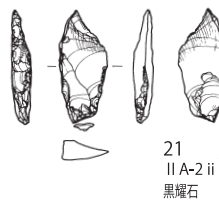
中見代 I III 文



19
II A-2 ii
黒耀石



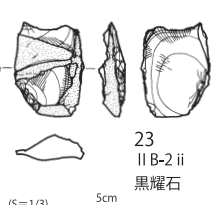
20
II A-2 ii
黒耀石



21
II A-2 ii
黒耀石



22
II A-2 ii
黒耀石



23
II B-2 ii
黒耀石

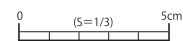
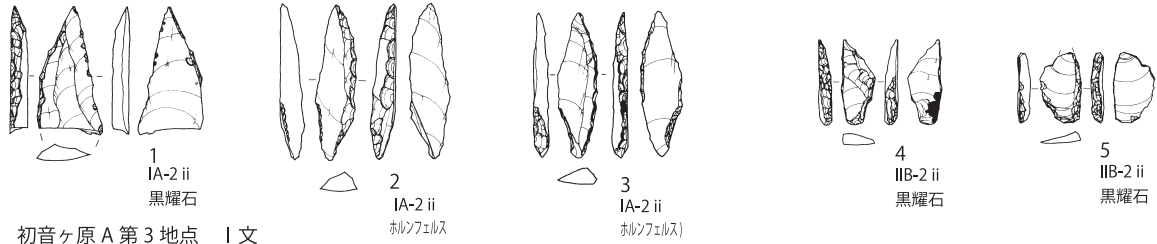


図5 グループ3のナイフ形石器(1)

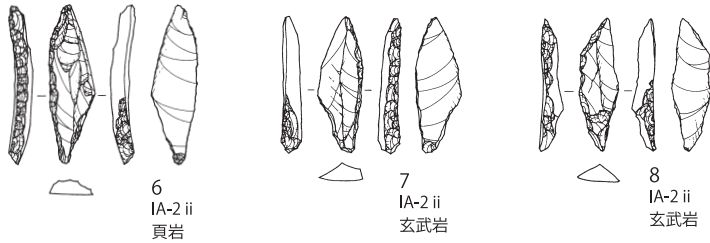
BB II

縦長剥片主体

富士石 X II 文



初音ヶ原 A 第3地点 I 文



横長・幅広剥片主体

清水柳北東尾根 BB II

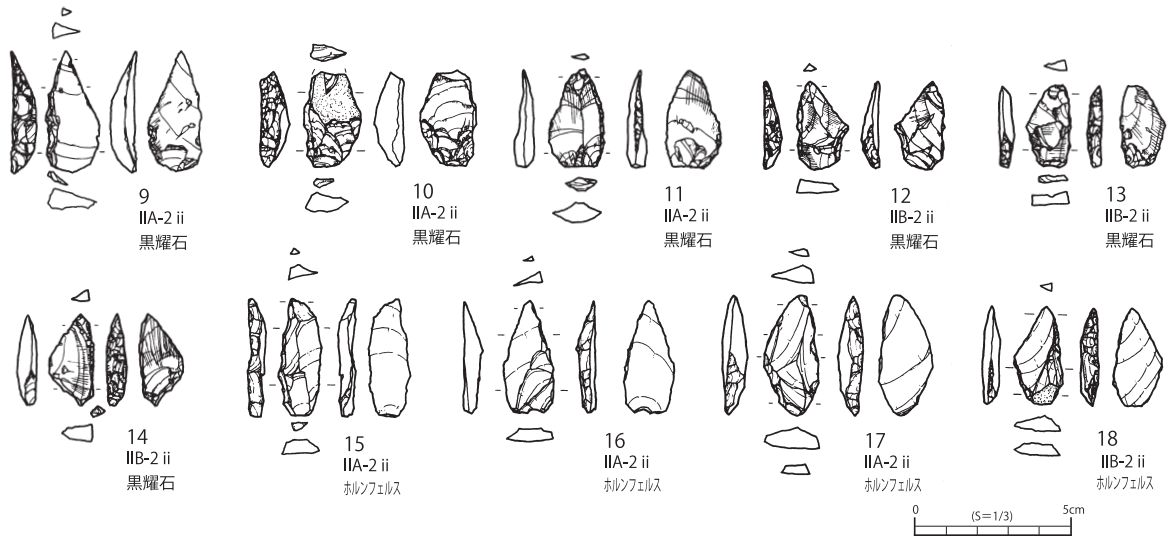


図6 グループ3のナイフ形石器(2)

NL

富士石 X III 文



清水柳北東尾根 NL

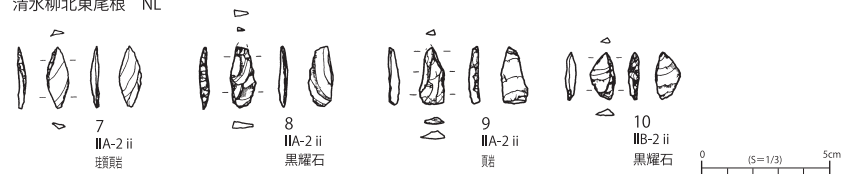


図7 グループ4のナイフ形石器

遺跡第Ⅲ文化層，富士石遺跡第ⅩⅡ文化層，初音ヶ原A遺跡第3地点第Ⅰ文化層，清水柳北遺跡東尾根BBⅡである。石器群の出土層位は，SCⅢb2～BBⅡである。

グループ4

グループ4は，グループ3のように縦長剥片素材のナイフ形石器をもたず，横長・幅広剥片のみを素材とする。非尖刃と尖刃の側縁加工ナイフ形石器からなり，急斜度調整により整形されている(図7)。それらのナイフ形石器は，いずれも3cm以下の小形品で構成されている。富士石遺跡第ⅩⅢ文化層，清水柳北遺跡東尾根NLが該当する。石器群の出土層位は，NLである。

(3) グループの共通点と相違点

上にみてきたグループごとのナイフ形石器の種類の組み合わせを表2にまとめた。ここで各グループのナイフ形石器を比較検討し，グループ間の共通点と相違点を抽出する。

まず，刃部形状に注目し，グループ間の共通点を確認する。各グループにおけるナイフ形石器の類型について刃部形状を観点に整理すると，グループ1では尖刃(ⅡA-1i)と非尖刃(ⅡB-2i)，グループ2は尖刃(ⅡA-1i，ⅡA-1iii)と非尖刃(ⅡB-2i，ⅡB-2ii，ⅡB-2iii)，グループ3では尖刃(ⅠA-1ii，ⅠA-2ii，ⅡA-2ii)と非尖刃(ⅡB-2ii)，グループ4では尖刃(ⅡA-2ii)と非尖刃(ⅡB-2ii)となる。このように，各グループは尖刃と非尖刃という2種の刃部形状のナイフ形石器をあわせもつことを指摘できる。

一方，上に指摘したような共通点とは別に，ナイフ形石器の素材をみると，グループ1・グループ2・グループ4の横長・幅広剥片のみの一群と，縦長剥片と横長・幅広剥片を素材とするグループ3というように，縦長剥片素材の有無により二群に分けられる。また，各類型の有無に注目すると，特定のグループに特徴的な類型がみとめられる。横長・幅広剥片を素材とした平坦調整による非尖刃(ⅡB-2iii)と尖刃(ⅡA-1iii)のナイフ形石器がグループ2に，縦長剥片素材の基部加工

表2 愛鷹・箱根山麓AT下位石器群におけるナイフ形石器の組み合わせ

	縦長剥片素材(I)		横長・幅広剥片素材(II)						層位	
	尖刃(A)		尖刃(A)			非尖刃(B)				
	基部(1)	側縁(2)	基部(1)	側縁(2)	側縁(2)	基部(1)	側縁(2)	側縁(2)		
	微細(i)	急斜度(ii)	急斜度(ii)	平坦(iii)	急斜度(ii)	微細(i)	急斜度(ii)	平坦(iii)		
グループ1	井出丸山Ⅰ文					○		○		SCⅣ～BBⅦ
グループ2	富士石Ⅰ文							○		BBⅦ
	中見代Ⅰ					○				BBⅥ
	富士石Ⅱ文					○				BBⅥ
	中見代Ⅰ					○				BBⅤ
	土手上							○		BBⅤ
	ニツ洞							○	○	BBⅣ
グループ3	葛原沢第Ⅰ									SCⅢb2
	中見代Ⅰ	○	○							SCⅢs2直上
	初音ヶ原A第2地点Ⅲ文	○	○							BBⅢ
	富士石ⅩⅡ文		○					○		BBⅡ
	初音ヶ原A第3地点Ⅰ文		○							BBⅡ
	中見代Ⅱ					○		○		SCⅢb1～SCs1
	清水柳北中尾根					○		○		BBⅢ
	中見代Ⅰ					○		○		BBⅢ
清水柳北東尾根					○		○		BBⅡ	
グループ4	富士石ⅩⅢ文						○	○		NL
	清水柳北東尾根						○	○		NL

(I A-1ii) と側縁加工 (I A-2ii) のナイフ形石器がグループ3に限ってみとめられる。以上のように、各グループのナイフ形石器は相違点をもつことから、尖刃・非尖刃という異なる刃部形状のナイフ形石器をあわせもつもの、それぞれのグループはナイフ形石器の異なる種類の組み合わせにより構成されていることがわかる。

(4) ナイフ形石器製作技術を観点とした編年

上記したように、愛鷹・箱根山麓のAT下位石器群を4つのグループに整理することができた。それでは、それぞれのグループはどのような関係をもつのだろうか。ここでグループ間の関係を、ナイフ形石器の調整技術および素材構成とサイズを観点として整理する。

ナイフ形石器に施される調整技術に注目すると、4つのグループをいくつかのまとまりとして捉えることができる。調整の性格では、グループ1の微細調整による素材形状保持的なナイフ形石器、グループ2・3・4の平坦調整や急斜度調整による素材形状修正的なナイフ形石器という2つのまとまりとして整理できる。さらに、後者は用いられる調整技術の種類により二分される。グループ2では急斜度調整、平坦調整、微細調整と多種の調整技術であるのに対し、グループ3・4では急斜度調整のみで整形されている。そして、調整技術では共通した特徴をもつグループ3と4においても、ナイフ形石器の素材構成とサイズに注目すると、3cm以上のナイフ形石器（縦長剥片素材）と3cm以下の小形のナイフ形石器（横長・幅広剥片素材）をあわせもつグループ3（図5・6）と、3cm以下の小形のナイフ形石器（横長・幅広剥片素材）のみによるグループ4（図7）というように、素材構成とサイズに明瞭な違いがみとめられるのである。

ところで、各グループと層位の対応関係を確認すると、グループ1はSC IV、グループ2はBB VII～BB IV、グループ3はSC III b2～BB II、グループ4はNLであった。つまり、これらのグループは出土層位において上下関係を有することから、上に指摘した特徴をナイフ形石器製作技術の変遷として理解できる。グループ1と2の間に素材形状保持的なナイフ形石器から素材形状修正的なナイフ形石器へというナイフ形石器製作の性格の画期、グループ2と3の間に平坦調整を含む多種の調整技術から急斜度調整による単一の調整技術へという整形方法の画期、グループ3と4の間には素材構成とサイズにおける画期を読みとることができるのである。

以上のように、ナイフ形石器製作技術の特徴に注目することで、愛鷹・箱根山麓のAT下位石器群を4つの段階に区分することができた。ここで、先行研究による編年案（表1）をふり返ると、愛鷹・箱根山麓のAT下位石器群を対象に5段階区分〔笹原2005、高尾2006、中村2011a〕と7段階区分〔中村2012⁽⁷⁾〕というように、本論と比して非常に細かなスケールの編年が提示されていた。このような非常に細かなスケールの編年は、❶で確認したように、「台形様石器群」の細分やSC III層石器群とBB III層石器群の区分および、BB III層石器群の細分について問題点を有するものの、地域内の変化を捉えるのには有効な面もある。しかし、本論では、日本列島中央部におけるAT下位石器群の石器製作技術の地域化とその背景をあきらかにすることを主題にしているため、時期区分に問題点を抱えたまま編年対比を試みるのではなく、ナイフ形石器製作技術にあらわれたより大きな変化である4つの段階を時間軸とし、中部高地および関東地方との比較検討を次章で試みる。

④……………中部高地および関東地方の石器群の概要と編年対比

ここでは、中部高地および関東地方の AT下位石器群の概要を確認し、その上で愛鷹・箱根山麓の編年との対比を試みる。なお、関東地方については、当該期資料が充実し、かつ黒耀石産地推定分析例が蓄積されている下総台地と武蔵野台地の遺跡を対象とした。また、本論では、ナイフ形石器の技術的特徴を編年の指標としているため、ナイフ形石器を出土する遺跡を次章以降の対象として選択した。

(1) 中部高地の AT下位石器群

列島中央部で重用された信州産黒耀石の原産地を有する中部高地の AT下位石器群をみる。野尻湖遺跡群の日向林 B 遺跡と大久保南遺跡 I 石器文化、弓振日向遺跡、追分遺跡第 4 文化層・第 5 文化層⁽⁸⁾を検討する。

日向林 B 遺跡(図 8)は、非尖刃のナイフ形石器からなる。いずれも横長・幅広剥片を素材とし、側縁加工を施すことでナイフ形石器に仕上げている。調整技術は、平坦調整(1~5)を主体に、急斜度調整(6~8)、微細調整(9)と多種の調整技術が用いられている。

大久保南遺跡 I 石器文化は、横長・幅広剥片を素材とした非尖刃の側縁加工ナイフ形石器(13~15)を主体に、横長・幅広剥片製の尖刃のナイフ形石器(12)と縦長剥片製の基部加工ナイフ形石器(10・11)が伴う。10・11の素材は、連続的に同様な縦長剥片を剥離する技術(いわゆる石刃技法)による。整形は微細調整(15)、急斜度調整(10・11・14)、平坦調整(12・13)等の多種の調整技術による。

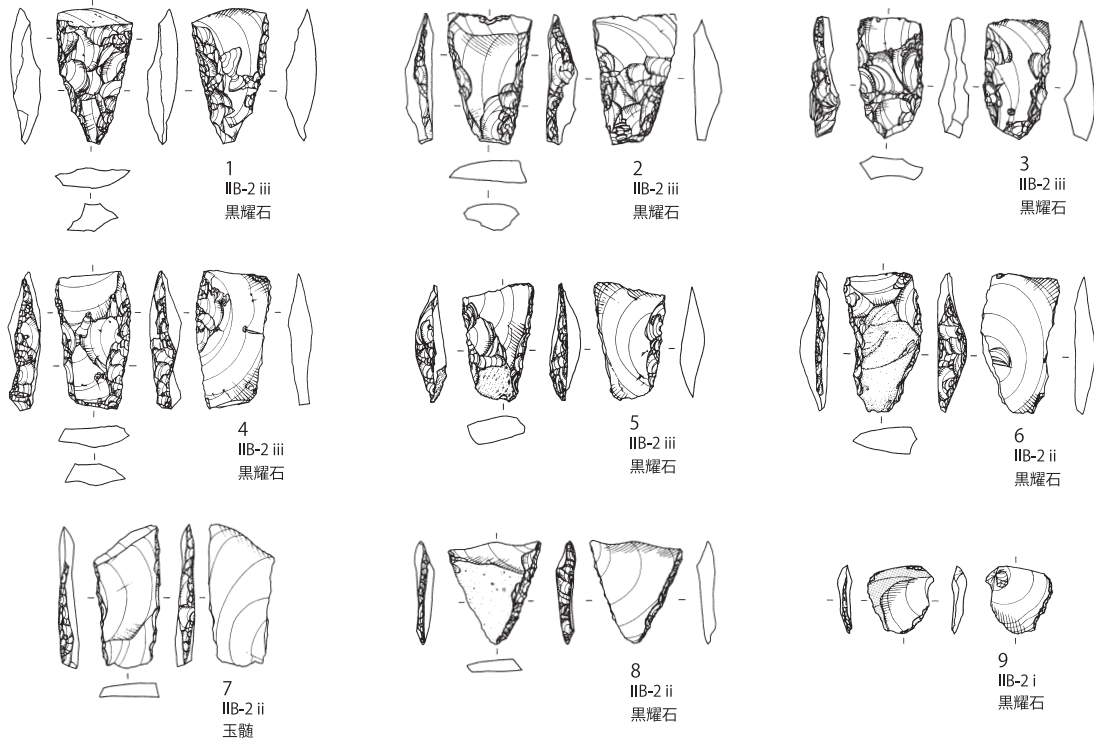
弓振日向遺跡では、尖刃の基部加工ナイフ形石器(17・18)に、横長・幅広剥片素材の非尖刃ナイフ形石器が伴う(16)。いずれの資料も素材剥片の打面部を基部に設定し、平坦調整により整形されている。尖刃のナイフ形石器の素材は連続的な縦長剥片剥離技術によるものと、横長・幅広剥片を素材とするものの二者がある。調整技術・形状ともに先に示した大久保南遺跡の基部加工ナイフ形石器と共通し、図 8-17 と図 8-12、図 8-18 と図 8-10・11 は類似する。

最後の追分遺跡(図 9)は、AT 直上とその下位に間層をはさみ文化層が確認されており、重層遺跡の検出例がほとんどない中部高地の編年研究において重要な指標となる。まず、下位の第 5 文化層をみると、横長・幅広剥片を素材とする非尖刃の側縁加工ナイフ形石器と、尖刃のナイフ形石器からなる。尖刃のナイフ形石器は、縦長剥片を素材とするものと、横長・幅広剥片素材とするものがある。縦長剥片素材のものは、素材の先端と基部に僅かに急斜度調整を施すことで整形されている。ナイフ形石器の整形にあたり、平坦調整(1・2・5)、急斜度調整(3・4・6・7)等の多種の調整技術が用いられている。

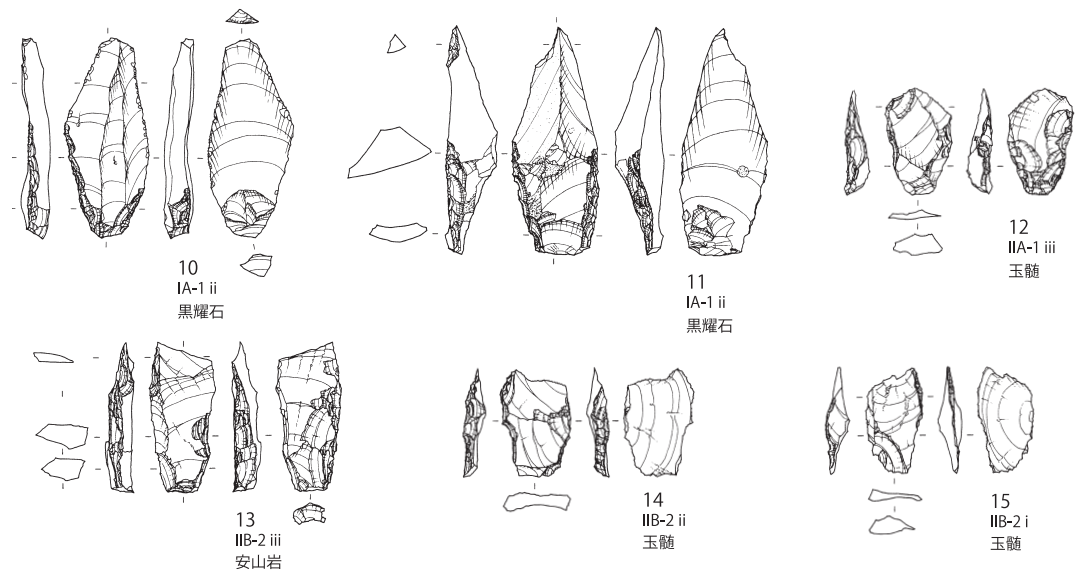
一方、追分遺跡第 5 文化層の上層から検出された第 4 文化層(8~10)は、縦長剥片を連続的に剥離する資料(10)が特徴的にみとめられる。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とし(8・9)、急斜度調整により整形されている。

以上、代表的な石器群を概観してきた。ここで、上に見てきた石器群をナイフ形石器の特徴に基

日向林 B



大久保南 I



弓振日向

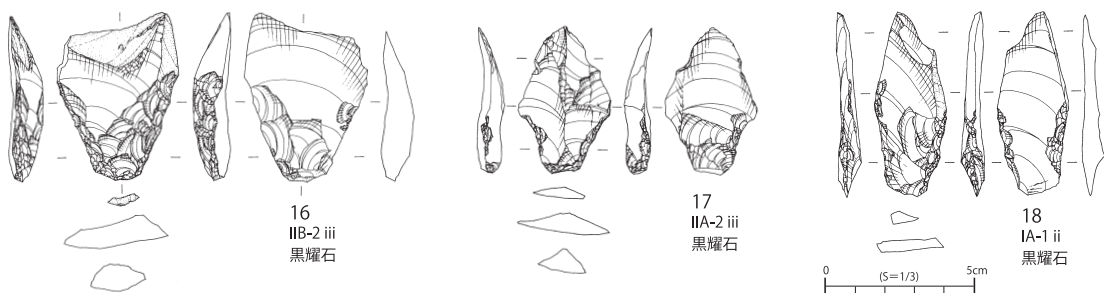
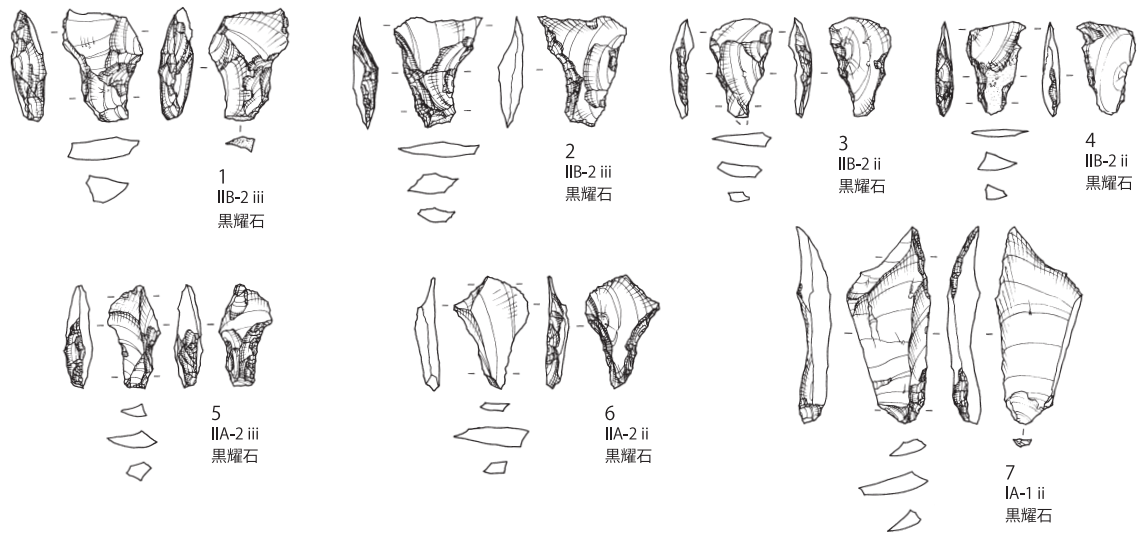


図8 中部高地 AT下位石器群のナイフ形石器(1)

追分

5文



4文

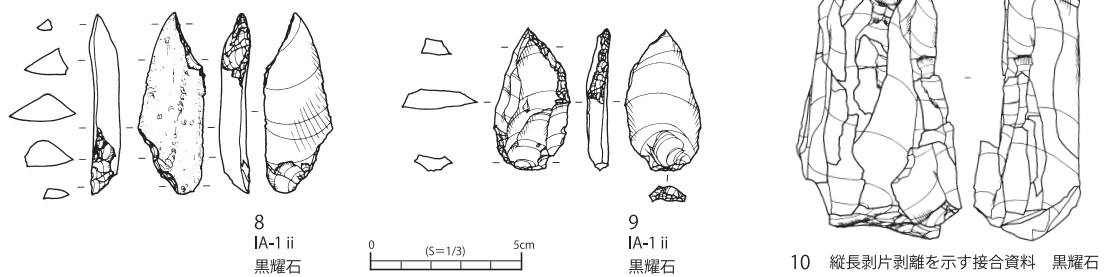


図9 中部高地 AT下位石器群のナイフ形石器(2)

づき整理する。まず、1つ目のまとまりは、ナイフ形石器の整形にあたって、平坦調整を主体とし多種の調整技術によって整形された横長・幅広剥片製のナイフ形石器を組成する一群である。日向林B遺跡、大久保南遺跡、弓振日向遺跡、追分遺跡第5文化層が該当する。2つ目は、縦長剥片に急斜度調整が施されたナイフ形石器からなる一群であり、追分遺跡第4文化層が該当する。AT直上から出土し、平坦調整を主体に多種の調整による第5文化層の上位に位置する。つまり、中部高地のAT下位石器群では、平坦調整を主体とし多種の調整技術による横長・幅広剥片製のナイフ形石器を組成する一群（古相）と、縦長剥片を急斜度調整により整形したナイフ形石器からなる一群（新相）の2つの石器群を確認することができる。

(2) 関東地方のAT下位石器群

次に関東地方の石器群についてみていく。関東地方のAT下位石器群は、ナイフ形石器の形態と調整加工を基準として4つの段階に区分できる〔大塚2009・2014, 小菅1991〕。当該期資料が充実する武蔵野台地と下総台地を対象に、ナイフ形石器の特徴を時期ごとに確認する(図10)⁽⁹⁾。

最古のX層段階の例として、多摩蘭坂遺跡8次調査出土のナイフ形石器をあげる。縦長剥片を素材とした基部加工の尖刃ナイフ形石器(1・2)と、横長・幅広剥片素材の二側縁加工非尖刃ナイフ形石器(3)からなる。いずれも微細調整により整形され、素材形状を保持する特徴がある。

IX層段階のナイフ形石器として、中山新田I遺跡と草刈六之台遺跡の例を示す。縦長剥片製の尖刃ナイフ形石器(4・5)と、横長・幅広剥片製の非尖刃二側縁加工ナイフ形石器(6・7)からなる。縦長剥片製のものは、基部加工を主体に、側縁加工(二側縁加工・一側縁加工)がみとめられる。整形は、縦長剥片素材では急斜度調整を専らとするが、横長・幅広剥片素材のものは平坦調整(6)・急斜度調整(7)・微細調整と多種の調整が特徴的に用いられる。

VII層段階のナイフ形石器は、東林跡遺跡の資料を典型とする。縦長剥片製の尖刃ナイフ形石器(8～10)と、横長・幅広剥片素材の非尖刃ナイフ形石器(11)がみられる。縦長剥片を素材とするものは、側縁加工(二側縁加工・一側縁加工)(8・9)を主体に、基部加工(10)がある。特に二側縁加工例では基部側に抉りをいれることで、基部を明瞭に作出するものが特徴的である(18)。急斜度調整により整形がおこなわれる。また、縦長剥片製ナイフ形石器の原料として、利根川上流域で採取される黒色頁岩とガラス質黒色安山岩が特徴的に用いられる[大塚2011]。

VI層段階のナイフ形石器の代表例として、鈴木遺跡VI層をあげる。縦長剥片を素材とした尖刃の二側縁加工ナイフ形石器が特徴的にみとめられる(12～15)。整形方法は急斜度調整で、なかには基部裏面調整が施される資料もある。類例として、堂ヶ谷戸遺跡4文化層と下野洞遺跡があげられる。

以上、関東地方のAT下位石器群におけるナイフ形石器を時期ごとにみえてきた。その変遷を追うと、素材形状保持型のナイフ形石器(X層段階)から、素材形状修正型のナイフ形石器(IX層段階以降)への移りかわりがみとめられる。つづいて素材形状修正型のナイフ形石器においても、平坦調整を含む多種の調整(IX層段階)から急斜度調整による単一の整形方法(VII・VI層段階)への移りかわりが指摘できる。そして、急斜度調整によるナイフ形石器製作技術が確立したVII・VI層段階では、VI層段階において二側縁加工ナイフ形石器が大多数を占めるようになる。

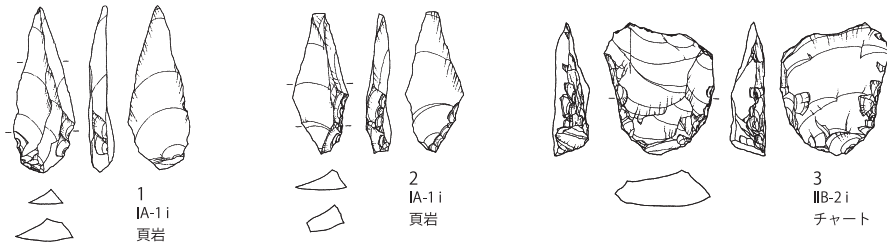
(3) 層序・テフラと¹⁴C年代を観点とした対応関係

まず、ナイフ形石器製作技術を観点とした各地の比較を行う前に、層序・テフラや¹⁴C年代にふれ、各地の対応関係をみる。層序・テフラでは、先行研究[須藤2006, 諏訪間2006, 町田2005]により、広範にわたる日本列島中央部の層序を対比する上でATが重要な基準とされている。この広域テフラであるATを基準とすることで、各地の層序から愛鷹・箱根山麓グループ4、中部高地の新相、関東地方のVI層段階を対比できる。

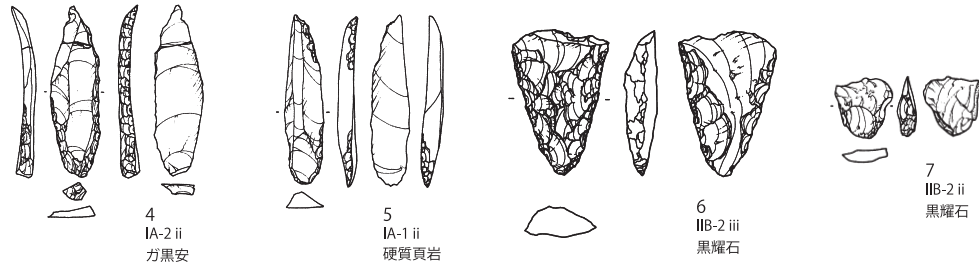
次に、¹⁴C年代をみる。近年の¹⁴C年代測定結果の集成[阿部2013, 工藤前掲, 中村2012・2013・2014]をもとに、これまでにみえてきたそれぞれの地域の石器群の時期と年代をみていく。

愛鷹・箱根山麓では、グループ2からグループ4の石器群にともなって¹⁴C年代が測定されている富士石遺跡と、グループ1の石器群については井出丸山遺跡をとりあげる。グループ1は井出丸山遺跡で、32, 720 ± 190 ~ 33, 230 ± 190yBPの分析結果がある。グループ2では、最も下層のBBⅦを出土層準とする富士石第I文化層で31, 620 ± 190 ~ 32, 730 ± 190yBP, 最も上層であるBBⅣの同第V文化層で29, 910 ± 160 ~ 30, 030 ± 160yBPの年代である。グループ3は、SCⅢ b1を出土層準とする同第Ⅷ文化層で28, 220 ± 140 ~ 28, 500 ± 140yBP, 最上層であるBBⅡの同XⅡ文化層で25, 510 ± 120 ~ 26, 010 ± 120yBPの測定結果が得られている。そして、最後のグループ4の年代は、NL出土の同XⅢ文化層で25, 400 ± 110 ~ 25, 680 ± 120yBPである。

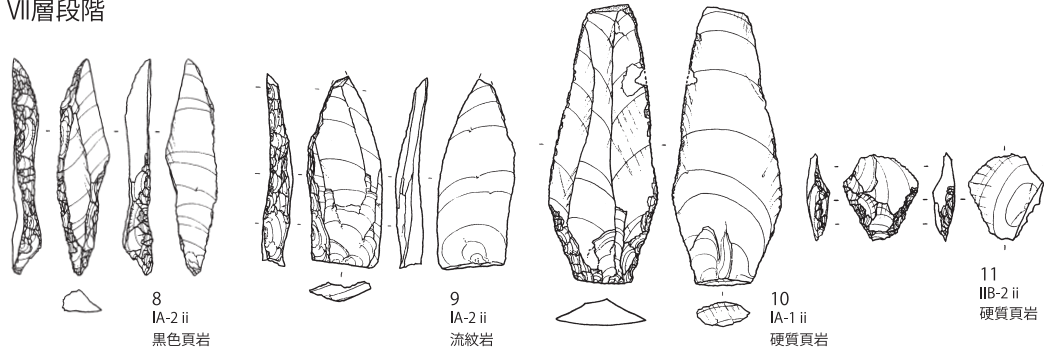
X層段階



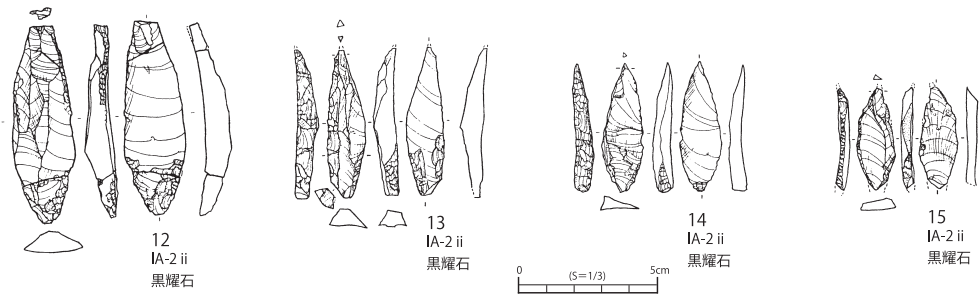
IX層段階



VII層段階



VI層段階



1～3：多摩蘭坂8次 4・5・7：中山新田I 6：草刈六之台2文 8～11：東林跡 12～15：鈴木VI層

図10 関東地方AT下位石器群のナイフ形石器

次に、関東地方の年代をみていく。関東地方のIX層段階では、良好な条件での年代測定結果がないため、X層段階、VII層段階、VI層段階の年代についてふれる。X層段階の分析結果は、高井戸東遺跡（近隣第三）で $31,780 \pm 200 \sim 32,000 \pm 170$ yBP、藤久保東遺跡で $29,640 \pm 240 \sim 30,030 \pm 250$ yBP である。VII層段階では、中東遺跡第2・3地点のVII層下部で $28,090 \pm 110 \sim 28,310 \pm 110$ yBP、最後のVI層段階では百人町三丁目遺跡6次調査のVI層下部で $25,560 \pm 130$ yBP の測定値が得られている。

中部高地の年代値は、まず古相の一群をみると、日向林B遺跡V b層出土炭化物では $28,320 \pm$

210 ~ 31, 420 ± 280yBP, 追分遺跡第5文化層で 29, 306 ± 248 ~ 31, 039 ± 298yBP である。一方、新相では、追分遺跡第4文化層において 25, 581 ± 383 ~ 29, 605 ± 276yBP の結果が得られている。ただし、新相の年代については、追分遺跡第4文化層は AT 直上から出土しているにもかかわらず、AT の年代 (24, 240 ± 250 ~ 24, 790 ± 350yBP [池田ほか1995]) よりも大幅に古い年代が多く、層序と ¹⁴C 年代測定結果が一致していない。

以上、各地の層序・テフラと ¹⁴C 年代をみてきた。ここで、層序・テフラと ¹⁴C 年代にもとづいて各地の対応関係を検討する。愛鷹・箱根山麓のグループ1の 32, 720 ± 190 ~ 33, 230 ± 190yBP で最も古く、対応する年代は中部高地と関東地方では確認できない。愛鷹・箱根山麓グループ2は 29, 910 ± 160 ~ 32, 730 ± 190yBP であり、関東地方の X 層段階 (29, 640 ± 240 ~ 32, 000 ± 170yBP), 中部高地古相 (28, 320 ± 210 ~ 31, 420 ± 280yBP) が重なる。つづく、愛鷹・箱根山麓グループ3は 28, 500 ± 140 ~ 25, 510 ± 120 (24, 760 ± 110) となり、関東地方の VII 層段階 (28, 090 ± 110 ~ 28, 310 ± 110yBP) が対応する。最後の愛鷹・箱根山麓グループ4では、25, 400 ± 110 ~ 25, 680 ± 120yBP であり、関東地方の VI 層段階 (25, 560 ± 130yBP) が対応する。中部高地新相の年代 (25, 581 ± 383 ~ 29, 605 ± 276yBP) は一致するとはいいがたいが、先述したように広域テフラである AT との出土層位の関係から、愛鷹・箱根山麓グループ4と関東地方の VI 層段階と並行することが予想される。

上に層序・テフラと ¹⁴C 年代にもとづいて各地の対応関係をみてきたが、本論の対象である AT 下位石器群の年代を考える上での課題が工藤 [前掲] により指摘されているので、ふれておきたい。工藤は、¹⁴C 年代の全国的な集成と検討を試みた結果、X 層段階と IX 層段階の石器群とで ¹⁴C 年代が明確に区分できていない可能性および、特に VII 層段階と VI 層段階における測定例の少なさを課題としてあげている。そのため、上で確認した ¹⁴C 年代の対応関係については、上記した工藤の意見を考慮し、大まかな対応関係を確認するために用いることとし、次にナイフ形石器製作技術を観点に各地の対比と比較を試みる。

(4) 中部高地および関東地方の石器群と愛鷹・箱根山麓のナイフ形石器製作技術の比較

ここで、先に提示した愛鷹・箱根山麓のグループを軸として、中部高地および関東地方とのナイフ形石器製作技術の対比と比較を試みる。

まず、中部高地の石器群との対比と比較を行う。中部高地の AT 下位石器群では、平坦調整を主体とし多種の調整技術による横長・幅広剥片製のナイフ形石器を組成する一群 (古相) と、縦長剥片を急斜度調整により整形したナイフ形石器からなる一群 (新相) の2つの石器群が確認されていた。前者の平坦調整を主体とし多種の調整技術によるナイフ形石器整形の特徴は、㊦でみたように愛鷹・箱根山麓のグループ2と共通することから、中部高地の古相を愛鷹・箱根山麓のグループ2と対比でき、年代的にも整合する。次に、その上層から確認された中部高地新相 (追分遺跡第4文化層) は、先述したように AT 直上という層位的条件から、AT が包含される愛鷹・箱根山麓グループ4と並行することが想定される。しかし、ナイフ形石器の特徴をみると、追分遺跡第4文化層では縦長剥片を素材とするのに対し、愛鷹・箱根山麓のグループ4では横長・幅広剥片を素材として

おり対応しない。つまり、中部高地では、愛鷹・箱根山麓と対比可能な石器群と不可能な石器群の存在が指摘できることになる。

それでは、関東地方と愛鷹・箱根山麓の石器群はどのような関係をもつのだろうか。関東地方最古の石器群であるX層段階のナイフ形石器は微細調整によっていた。そのような素材形状保持的なナイフ形石器は、愛鷹・箱根山麓のグループ1と共通した特徴をもつ。つづく、IX層段階のナイフ形石器は、平坦調整を主体に多種の調整による点で、愛鷹・箱根山麓のグループ2と共通する。VII層段階のナイフ形石器については、縦長剥片と横長・幅広剥片を素材に急斜度調整により整形する特徴が、愛鷹・箱根山麓のグループ3と共通し年代的にも整合する。そして、最後のVI層段階はATと年代から、愛鷹・箱根山麓グループ4との並行関係が予測される。しかし、関東地方の当該期のナイフ形石器は縦長剥片素材に特徴づけられるのに対し、愛鷹・箱根山麓グループ4は横長・幅広剥片を素材としており様相を異にする。ナイフ形石器の特徴から、X層段階はグループ1に、IX層段階はグループ2に、VII層段階はグループ3に対比される一方、グループ4と関東地方の関係性はみとめられないことが確認できた。

以上、愛鷹・箱根山麓のナイフ形石器を軸に、中部高地および関東地方との対比と比較を試みた。その結果をテフラと¹⁴C年代を踏まえ総合的に検討する。ナイフ形石器製作技術を観点とした場合、平坦調整を主体にするという技術的特徴から愛鷹・箱根山麓グループ2と中部高地古相と関東地方IX層段階の共通性が確認できる。しかし、年代については、グループ2と中部高地古相については対応するものの、関東地方では一段階古いX層段階の年代と重なり、ナイフ形石器製作技術の特徴と年代が一致しない。この点については、先述したように工藤〔前掲〕の指摘したX・IX層段階の年代に関する課題を考慮し、本論ではナイフ形石器製作技術上の共通性を重視する。そのため、グループ1と関東地方のX層段階、グループ2と中部高地古相と関東地方のIX層段階を対比する。つづくグループ3はナイフ形石器製作技術と年代から関東地方VII層段階と対比される。そして、グループ4については、ナイフ形石器製作技術上の共通性はみとめられないものの、年代とテフラから中部高地新相と関東地方VI層段階と並行すると考えられる。以上の検討により、日本列島中央部のAT下位石器群を4つの段階に対比することができた(表3)。ここで、日本列島中央部のAT下位石器群にみとめられる4つの段階を、これまで編年研究の指標とされてきた関東地方の時期区分にならい、古い方からX層段階、IX層段階、VII層段階、VI層段階と呼称することにする。

ここで編年表(表3)をみると、IX層段階は全地域で対比できたものの、X層段階とVII層段階に対比される石器群は中部高地には確認できないことがわかる。また、VI層段階については、全地域で石器群がみとめられる一方、中部高地と関東地方の両方と愛鷹・箱根山麓のナイフ形石器製作技術は異なる特徴をもつことがあきらかになった。つまり、列島中央部に位置する愛鷹・箱根山麓と中部高地そして関東地方のそれぞれが密接な関係をもつ時期と、逆にそれぞれの関係が断絶する時期が指摘できるのである。このようなナイフ形石器製作技術上のつながりと断絶は何に起因するのだろうか。次章では、ナイフ形石器製作技術における地域間のつながりと断絶の原因をあきらかにするために、これらの地域で共通してナイフ形石器の主な原料として用いられている黒耀石に注目していく。

表3 日本列島中央部における AT下位石器群の編年

段階	愛鷹・箱根山麓	中部高地	関東地方
X層	井出丸山 I 文	…	… 多摩藪坂遺跡8次
IX層	富士石 I 文 中見代 I BBVI 富士石 II 文 中見代 I BBV 二ツ洞	日向林B遺跡 大久保南遺跡 I 石器文化 弓振日向遺跡 追分遺跡第5文	… 中山新田 I 遺跡 草刈六之台遺跡
VII層	葛原沢第 I 中見代 I SCIII _s 2直上 初音ヶ原A第2地点 III文 富士石 X II 文 初音ヶ原A第3地点 I 文 中見代 II SCIII _b 1 清水柳北中尾根 富士石 IX 文 清水柳北東尾根 BB II	…	… 東林跡遺跡
VI層	富士石 X III 文 清水柳北東尾根 NL	追分遺跡第4文	鈴木遺跡VI層 堂ヶ谷戸遺跡 下野洞遺跡

⑤……………黒耀石利用の変遷と地域間関係の検討

(1) 地域ごとの黒耀石の利用

列島中央部には、いくつかの黒耀石産地が分布している。主要な産地として、愛鷹・箱根山麓付近に位置する伊豆・箱根と神津島、中部高地に位置する信州、関東地方に位置する高原山がある。それぞれの地域において、これらの黒耀石がどのように利用されているかを検討するため、産地推定分析結果を集成し示した(表4～6, 図11～13)。黒耀石の利用状況を地域・時期ごとに概観する。

愛鷹・箱根山麓では、X層段階とVI層段階の分析例が少ないものの、全体的な傾向としてより近距離に位置する伊豆・箱根産と神津島産を中心に、信州産黒耀石が加わる状況がみとれる(表4, 図11)。現状では、関東地方に位置する高原山産黒耀石はみとめられない。特にIX層段階では伊豆・箱根を中心に、神津島、信州産が加わり、多産地の黒耀石を利用している。神津島産の黒耀石の利用状況に注目することで、神津島産黒耀石の利用度の高いX・IX層段階と、利用度の低いVII・VI層段階に区分することができる。時期が下るにつれ利用産地が限定化される傾向を指摘できる。ここで得られた傾向は先行研究[池谷・望月1998]と一致する。

次に、関東地方の黒耀石産地推定分析の結果を検討する(表5, 図12)。先述したように、分析資料が豊富な武蔵野台地と下総台地を対象に集成した。集成結果を見る限り、信州産を主体とするVI層段階を除いて地域内に産出する高原山産黒耀石が専ら利用されている。島田〔前掲〕が指摘しているように、X層段階・IX層段階では多寡はあるものの、高原山、伊豆・箱根、神津島、信州と多地域の産地の黒耀石を網羅的に利用する。一方、VII層段階では高原山と信州、VI層段階では信州というように、VII層段階以降に利用産地の限定化がみとれる。特にVI層段階では鈴木遺跡〔鈴木遺跡

表4 愛鷹・箱根山麓 AT下位石器群の黒耀石産地構成

時期	遺跡名	信州	伊豆・箱根	神津島	高原山系	不明・未分析等	計	文献
X層	井出丸山 第I文化層	3		25		13	41	沼津市教育委員会2011
	富士石 第I文化層	110	51	1		22	184	静岡県埋蔵文化財調査研究所2010
IX層	富士石 第II文化層		2	28		2	32	静岡県埋蔵文化財調査研究所2010
	追平B 第II文化層	87	33	1		1	122	中村2011b
	土手上I BBV	70	669	126			865	池谷・望月1998
	土手上II BBV	8	304	41			353	池谷・望月1998
	土手上III BBV	16	340	328			684	池谷・望月1998
	清水柳北(東) BBV	59	5				64	池谷・望月1998
	二ツ洞 BBIV			17			17	池谷・望月1998
	初音ヶ原A1地点 BB4	33	526	11			570	三島市教育委員会1999
	初音ヶ原A2地点 文化層V BB4		16				16	三島市教育委員会1999
	中見代II SCⅢb1	27					27	池谷・望月1998
	中見代I BBⅢ下	4	74				78	池谷・望月1998
	清水柳北(中) BBⅢ下		72				72	池谷・望月1998
	柏葉尾 BBⅢ下	196	30				226	池谷・望月1998
	土手上 BBⅢ中	2	203				205	池谷・望月1998
	VII層	初音ヶ原A1地点 BB3	20	1151	1			1172
初音ヶ原A3地点 文化層II BB3・2・NL			83				83	三島市教育委員会1999
富士石 第IX文化層		8	165			9	182	池谷・望月1998
清水柳北(東) BBⅡ下		28	169				197	三島市教育委員会1999
初音ヶ原 A1地点 BB2		95	896	1			992	三島市教育委員会1999
富士石 第XⅡ文化層		11	76	2		2	91	静岡県埋蔵文化財調査研究所2010
VI層	富士石 第XⅢ文化層	73	101			18	192	静岡県埋蔵文化財調査研究所2010

表5 関東地方 AT下位石器群の黒耀石産地構成

時期	遺跡名	信州	伊豆・箱根	神津島	高原山系	不明・未分析等	計	文献
X層	武蔵台 Xa層	136		1		13	150	比田井ほか2012
	多摩蘭坂第5地点 X層		1	3	9	1	14	比田井ほか2012
IX層	中東遺跡第2地点 IX層	3	53			1	57	三芳町教育委員会2011
	農協前 第1文化層	1			10		11	千葉県教育振興財団2011b
	南三里塚宮原第1			2	155	4	161	杉原ほか2005
	泉北側第3遺跡	11	2		35		48	千葉県教育振興財団2011a
	原山I文 IX下				4		4	千葉県教育振興財団2009
	原山IIa文 IX	85				47	132	千葉県教育振興財団2009
	原山IIb文 IX	17			833	23	873	千葉県教育振興財団2009
VII層	東林跡 VII層	6	1		64	4	75	鎌ヶ谷市教育委員会2010
	荒野前 第3文化層	126			106		232	千葉県教育振興財団2012
	市野谷向山 第2文化層				9		9	千葉県教育振興財団2011c
VI層	下野洞	25					25	君津都市文化財センター2005
	鈴木	透明						鈴木遺跡刊行会1978
	堂ヶ谷戸	透明						世田谷区教育委員会2001

表 6 中部高地 AT下位石器群の黒耀石産地構成

時期	遺跡名	信州	伊豆・箱根	神津島	高原山系	不明・未分析等	計	文献
	日向林B	3540					3540	長野県埋蔵文化財センター2000c
X層	大久保南 I 石器文化層 (I a+ I b)	492					492	長野県埋蔵文化財センター2000c
	追分 5文	39					39	長門町教育委員会2001
VI層	追分 4文	126					126	長門町教育委員会2001

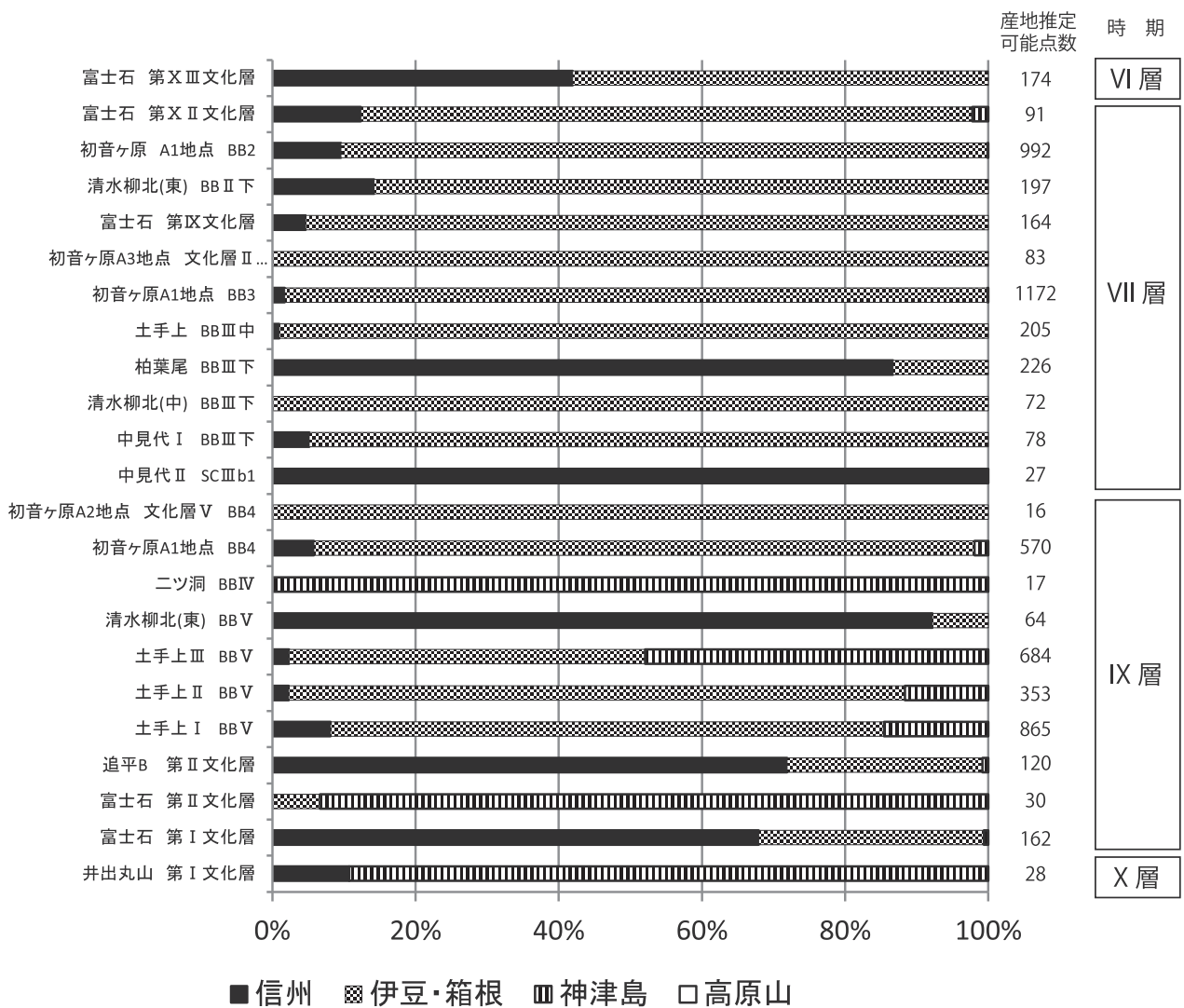


図 11 愛鷹・箱根山麓 AT下位石器群の黒耀石産地構成グラフ

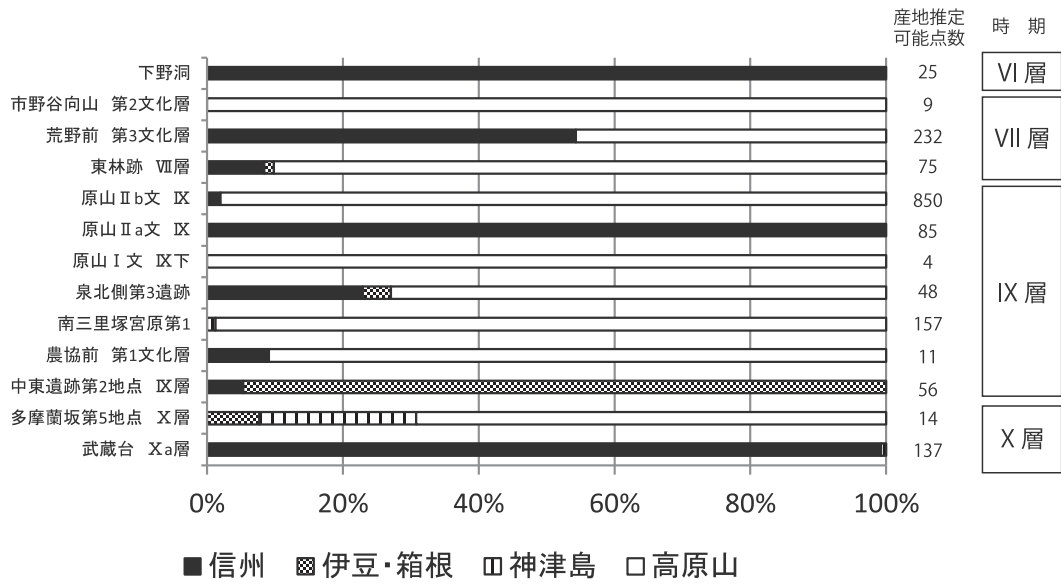


図12 関東地方 AT下位石器群の黒耀石産地構成グラフ

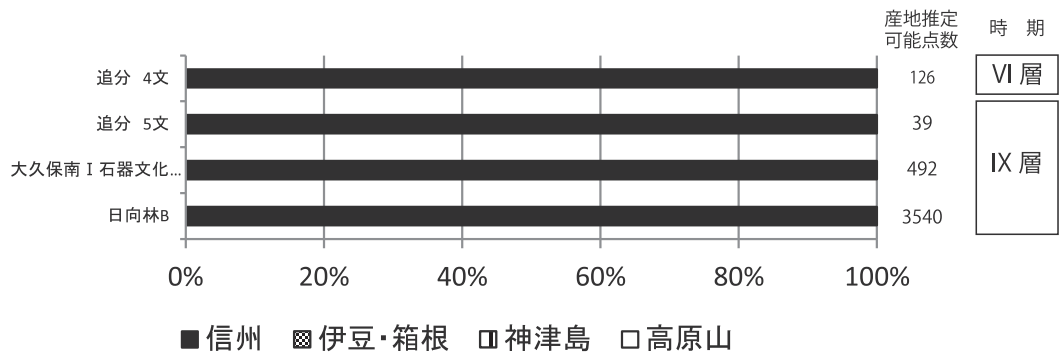


図13 中部高地 AT下位石器群の黒耀石産地構成グラフ

堂ヶ谷戸4文

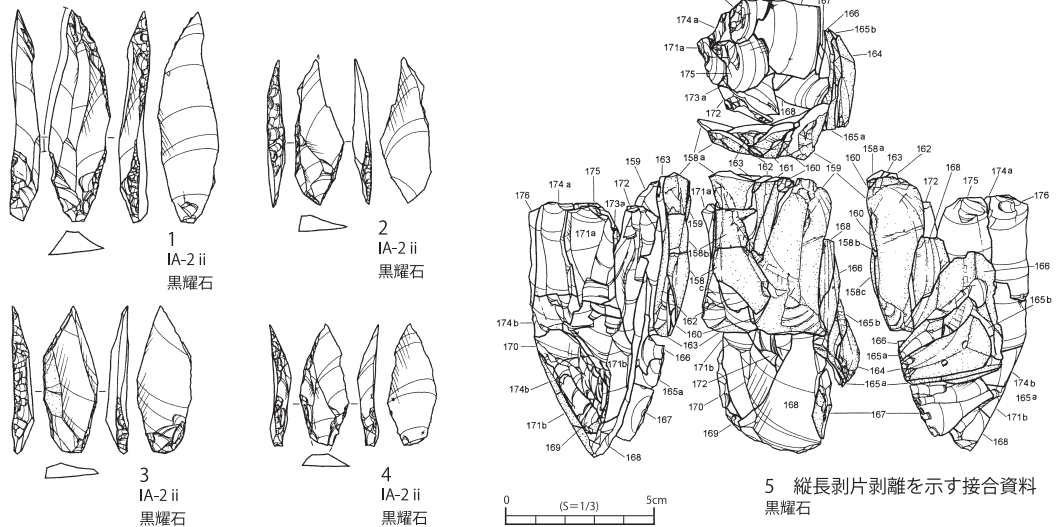


図14 関東地方VI層段階の石器群

刊行会 1978], 堂ヶ谷戸遺跡 [世田谷区教育委員会 2001], 下野洞遺跡 [君津郡市文化財センター 2005] のように信州産黒耀石を多用し, 縦長剥片製のナイフ形石器を製作する状況が確認できる (図 14)。

一方で, 信州産黒耀石の原産地を有する中部高地では, 全て信州産が用いられており時期ごとの変化はみとめられない (表 6, 図 13) ことから, 愛鷹・箱根山麓や関東地方と異なる特徴をもつことを指摘できる。

(2) 黒耀石利用を観点とした地域の性格

上記したように, 黒耀石産地を地域内に有する 3 地域 (中部高地, 愛鷹・箱根山麓, 関東地方) のうち, 中部高地では原石採取地と近接する追分遺跡だけでなく, 信州産黒耀石産地から 50km 以上も離れた場所に位置する野尻湖遺跡群においても信州産黒耀石のみが利用されていた。

一方, 愛鷹・箱根山麓および関東地方では, 中部高地とは対照的に地域内で採取可能な黒耀石を用いながらも, 地域外の黒耀石もあわせて利用していた。さらに, 愛鷹・箱根山麓や関東地方において, 搬入された黒耀石原料を素材にナイフ形石器が製作されていることを踏まえれば, 愛鷹・箱根山麓と関東地方はナイフ形石器を製作・使用するために搬入された原料を消費する場 (消費地) としての性格を強く帯びていることを指摘できる。そして, 地域内の黒耀石のみが大量にみられる中部高地には, 愛鷹・箱根山麓や関東地方への原料の供給地としての性格をみとめることができる。つまり, いずれの地域も黒耀石の産地を地域内に有する点で共通するものの, 信州産黒耀石の利用に注目することで, 信州産黒耀石の供給地と消費地という関係を読みとることができるのである。

次に, 黒耀石の供給地と消費地という地域の性格を踏まえて, 各地の黒耀石の利用傾向をあらためて確認し, 地域間の関係をあきらかにする。

(3) 黒耀石利用を観点とした地域間関係

前章で示したように, 層序・テフラと年代およびナイフ形石器製作技術の検討に基づいて愛鷹・箱根山麓を軸に中部高地と関東地方との対応関係を検討した結果, IX 層段階は全地域で対比できたものの, X 層段階と VII 層段階は中部高地には確認できず, VI 層段階では中部高地・関東地方とつながりをみとめることができなかつた。ここで視点をかえ, 供給地としての性格をおびる中部高地を起点に, 愛鷹・箱根山麓や関東地方という消費地との関係をみていく。

既に指摘したとおり, IX 層段階では, 消費地において信州と神津島産が共通して利用される多地域の産地の黒耀石で構成されていた。ナイフ形石器の技術的特徴も全地域で共通することから, 黒耀石の利用状況とナイフ形石器の技術的特徴との関係は整合的である。次に, VI 層段階をみると, 愛鷹・箱根山麓では信州産黒耀石を利用するものの主体的ではなく, ナイフ形石器の特徴も横長・幅広剥片を素材としている点で中部高地とは異なっていた。一方で, もう 1 つの消費地である関東地方をみると, 信州産黒耀石が主体を占め, さらに信州産黒耀石を原料として縦長剥片製のナイフ形石器を製作している (図 14) ことから, 中部高地と共通した特徴を指摘することができる。

以上のように黒耀石の利用を観点とすることで, 供給地を起点とした地域間のつながりと, ナイフ形石器製作技術の結びつきを確認することができた。それでは, ナイフ形石器製作技術の時期的変遷と, 黒耀石の利用にみとめられる地域化はどのように関連しているのだろうか。最後に, 両者の関

係をみることで、日本列島中央部における石器製作技術の地域化と背景をあきらかにしたい。

⑥……………日本列島中央部におけるナイフ形石器製作技術の地域化とその背景

(1) 中部高地における石器群形成の背景

ナイフ形石器製作技術や層序・テフラおよび年代の検討により、列島中央部のAT下位石器群を4つの段階に区分し対比することができた。また、愛鷹・箱根山麓、中部高地、関東地方の3地域は、信州産黒耀石の供給地（中部高地）と消費地（愛鷹・箱根山麓、関東地方）という性格の違いにより、黒耀石を仲介として密接な関係をもっていることがわかった。最後に、ナイフ形石器製作術とその主要原料である黒耀石の利用を観点に、中部高地石器群の形成背景と、AT下位石器群における石器製作技術の地域化のあり方とその背景を議論する。

ここで黒耀石の利用状況をあらためて確認する。消費地では、X～VI層段階の全ての時期の石器群が途切れることなく存在し、愛鷹・箱根山麓では伊豆・箱根あるいは神津島、関東地方では高原山というように、それぞれ地域内の黒耀石を主体としながらも、他地域で産出する黒耀石があわせて利用されていた。また、時期ごとの特徴については、X・IX層段階は多産地の構成を示すのに対し、VII・VI層段階では黒耀石産地の限定化という石材利用の画期がみとめられた。一方で信州産黒耀石の供給地である中部高地では、時期を問わず信州産黒耀石のみが利用され、IX層段階とVI層段階に限って石器群がみとめられた。つまり、石器群が時期的に途切れなく存在する消費地とは対照的に、石器群が時期的に断続的に残されていることになる。このように供給地で石器群がみとめられなくなる原因は何なのか。

中部高地で人類活動の痕跡が乏しいX層段階とVII層段階について、消費地の状況を確認する。そこで、X層段階とVII層段階のナイフ形石器に用いられる石材に注目すると、特にVII層段階では地域内の黒耀石に切り替わるだけでなく、既に指摘したように、愛鷹・箱根山麓では富士川産ホルンフェルス、関東地方では黒色頁岩やガラス質黒色安山岩というように非黒耀石の在地石材がナイフ形石器の原料として専ら利用されていることを指摘できる。すなわち、X層段階・VII層段階の中部高地において人類の活動痕跡が乏しい理由は、愛鷹・箱根山麓や関東地方におけるナイフ形石器に利用される石材の変化（非黒耀石の在地石材の利用）を反映していると考えられる。これらの点から、中部高地における石器群の形成は、遠く離れた愛鷹・箱根山麓や関東地方での石材利用と表裏一体の関係であったことがわかる。⁽¹²⁾

(2) 日本列島中央部におけるナイフ形石器製作技術の変遷と地域化の背景

ところで、ナイフ形石器の製作技術には、X層段階からIX層段階にかけて素材形状保持から素材形状修正的なナイフ形石器への移りかわり、IX層段階からVII層段階にかけて多種の調整から単一の調整への移りかわりが、愛鷹・箱根山麓および関東地方で共通してみとめられていた。しかし、つづくVI層段階では一転して、関東地方では縦長剥片製ナイフ形石器、愛鷹・箱根山麓では横長・幅

広剥片製ナイフ形石器というように、ナイフ形石器の構成だけでなく、その技術基盤となる剥片剥離技術についても全く異なる様相を示すようになる。つまり、X～VII層段階のナイフ形石器は共通した特徴を多くもつが、VI層段階になると突如としてナイフ形石器の特徴では対比不可能なほどに地域独自の特徴をもつようになるのである。ここに、VII層段階とVI層段階の間に、ナイフ形石器製作技術上の画期をみとめることができる。

これまでみてきたように、列島中央部のAT下位石器群には、IX層段階とVII層段階の間に石材利用の画期が、VII層段階とVI層段階の間にナイフ形石器製作技術上の画期がたて続けにみとめられることになる。このことは同時に、石材利用の画期（VII層段階）とナイフ形石器製作技術の画期（VI層段階）には、時期にして一段階分のズレがあることを示している。

それでは、AT下位石器群にみとめられる画期の時間的なズレは何を意味するのだろうか。VII層段階にみとめられる石材利用の画期は、黒耀石の産地構成が多産地から限定化する変化であった。その間、中部高地では人類の活動痕跡が乏しくなり、愛鷹・箱根山麓と関東地方では信州産黒耀石は細々と利用されるものの、非黒耀石製の在地石材を原料に共通した特徴をもつナイフ形石器が製作されていた。このことは、ナイフ形石器製作技術は共通する一方で、VII層段階において石材の在地化（地域化）が果たされたことを示す。そして、つづくVI層段階では、石材の地域化により分離された愛鷹・箱根山麓および関東地方それぞれの地域を舞台に、地域独自のナイフ形石器が製作された。このように、ナイフ形石器製作技術の劇的な変化に先だって生じた石材の地域化を受けて、VI層段階ではそれぞれの地域に適したナイフ形石器製作技術が開発されたと考えることができる（図15）。

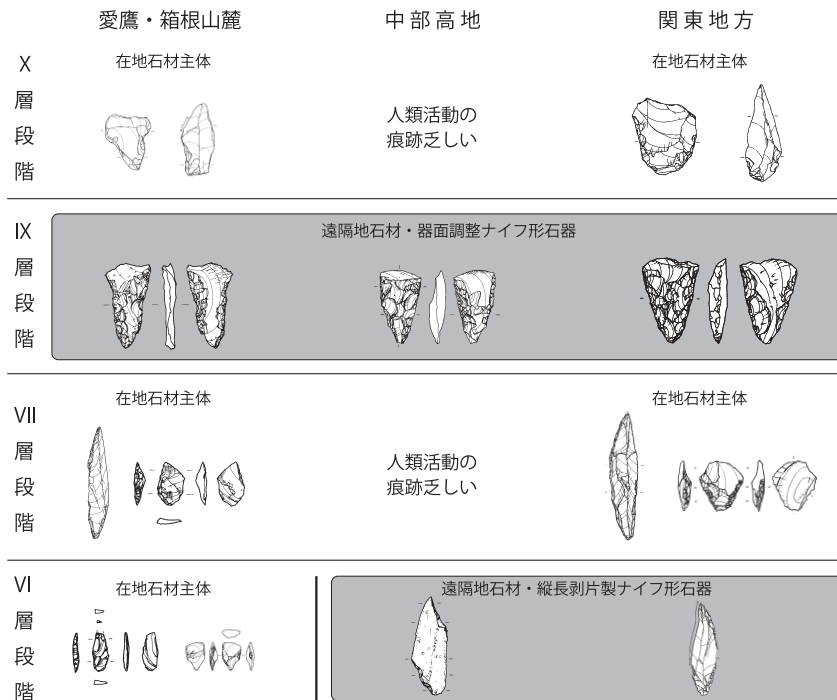


図15 日本列島中央部におけるナイフ形石器製作技術の地域化と石材利用の関係

ところで、島田〔前掲〕により、地域化が生じる以前のⅨ層段階に特徴的にみとめられた環状ブロック形成の背景に石材資源などの情報共有という生存環境の探索が、その消滅に生存環境探索の完了および「人類のより小さな地域により小さな集団が分かれ住む」現生人類の定着が想定されている。そのような意見がある中、本論であきらかにしたように、列島中央部における石材利用とナイフ形石器の画期の時間的なズレは、原料の在地化（居住域近傍の石材利用）がきっかけ（Ⅶ層段階）となり、ナイフ形石器製作技術が地域独自化（Ⅵ層段階）する段階的な地域化の過程を示していた。

仮にⅨ層段階とⅦ層段階の間に現生人類定着への転換を想定するならば、列島中央部における石器製作技術の地域化は、生存環境の探索を終えた人類が居住域近傍の石材利用に切り替え、狭く限られた地域資源に最適な狩猟具（ナイフ形石器）を作りだしより小さな地理的範囲に住み分けていく、現生人類の列島への定着の過程を示唆していると考えられる。

【謝辞】

本論を草するにあたって、安蒜政雄先生（明治大学）および、飯田茂雄氏からご教示をいただいた。資料の実見にあたり、池谷信之（沼津市教育委員会）氏にご助力賜った。英文要旨については、石村史氏に作成していただいた。また、査読者によるコメントは、本稿の改善に役立った。末筆ながら、記して御礼申し上げる。

なお、本論は、筆者に与えられた平成20年度大久保忠和考古学振興基金「本州島における後期旧石器時代前半のナイフ形石器形態研究」による成果の一部を含むことを明記し、感謝申し上げます次第である。

註

(1)——中村雄紀は、2011年に発表した論文では、富士石遺跡第Ⅰ文化層と追平B遺跡第Ⅱ文化層における、ホルンフェルス製石器群と「台形様石器」石器群の供伴から、両石器群を同時期異相と考えた〔中村2011a〕。しかし、翌年、中村は見解を一転し、下記の理由からホルンフェルス石器群を先行するものとした〔中村2012〕。第一の理由として、ホルンフェルス石器群と、石斧を伴う「台形様石器」石器群は、「基本的に別個の遺跡・地点に残されており、現時点では両者が共伴している、或いは同時に出現するといった現象の証拠となる出土事例はない」点をあげた。第二に、井出丸山遺跡出土石器群の¹⁴C年代と出土層位をその理由とした。ただし、同論文の中では、「大規模な井出丸山遺跡、追平B遺跡では基部加工尖頭形石器、台形様石器、鋸歯縁削器といった明瞭な二次加工をもつ剥片石器が出土している」という記述があり、ホルンフェルス製石器群と「台形様石器群」の共伴も示されており、両石器群を時期差とする見解とは矛盾する特徴も指摘されている。

(2)——安蒜の地域区分は以下のとおりである。東北地

区（東北地方、中部地方北半、関東地方北半）、中央地区（関東地方南半、中部地方南半）、西南地区（近畿地方、中国地方、四国地方）、九州地区（九州地方）とされる。

(3)——池谷・望月論文〔1998〕におけるAT下位石器群の時期区分は、高尾〔1995〕と笹原〔1995〕によっている。第1期はBBⅥ層～BBⅣ層から出土し「台形様石器」と石斧類を特徴とする時期、第2期はScⅢb2層～NL層から出土し、石刃技法の出現とナイフ形石器文化の成立する時期とされる。

(4)——ここでいう縦長剥片とは、横長・幅広剥片剥離により偶発的に剥離されるものではなく、連続的な縦長剥片剥離による「石刃」のことを指す。

(5)——対象遺跡の文献については以下の通りである。井出丸山遺跡〔沼津市教育委員会2011〕、葛原沢第Ⅰ遺跡SCⅢb2〔静岡県考古学会シンポジウム実行委員会1995〕、清水柳北遺跡中尾根・清水柳北遺跡東尾根〔沼津市教育委員会1990〕、中見代第Ⅰ遺跡BBⅥ〔静岡県考古学会シンポジウム実行委員会 前掲〕、中見代第Ⅰ遺跡BBⅤ・SCⅢs2直上・第Ⅲ文化層〔沼津市教育委員会

1989], 中見代第Ⅱ遺跡 [沼津市教育委員会 1988], ニッ洞遺跡 [沼津市教育委員会 1991], 初音ヶ原 A 遺跡第 2 地点 [三島市教育委員会 1999], 初音ヶ原 A 遺跡第 3 地点 [三島市教育委員会 1992]。富士石遺跡 [静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010]。

(6)——図 3-2 の尖刃ナイフ形石器は、中村 [2012] が指摘するように、石刃技法によるものではなく、横長・幅広剥片剥離技術により偶発的に生じたものを素材としたと考えられる。

(7)——中村 [2012] は、BBⅣより下層の石器群を対象に 4 段階に区分している。BBⅣより上位の石器群の編年については中村 [2011a] を参照すると 3 段階に区分していることから、中村は愛鷹・箱根山麓の AT 下位石器群を 7 段階に区分していることになる。

(8)——対象遺跡の文献については以下の通りである。追分遺跡 [長門町教育委員会 2001], 貫ノ木遺跡 [長野県埋蔵文化財センター 2000b], 日向林 B 遺跡 [長野県埋蔵文化財センター 2000a], 弓振日向遺跡 [原村教育委員会 1988]。

(9)——対象遺跡の文献については以下の通りである。多摩蘭坂遺跡 8 次調査 [国分寺市遺跡調査会 2003], 中山新田Ⅰ遺跡 [千葉県文化財センター 1986], 草刈六之

台遺跡 [千葉県文化財センター 1994], 東林跡遺跡 [織笠 2010], 鈴木遺跡Ⅵ層 [鈴木遺跡刊行会 1978]。

(10)——富士石遺跡 XⅡ文化層の ^{14}C 年代測定結果では、一例のみ $24,760 \pm 110\text{yBP}$ という新しい測定値が得られている。この年代については、上層である NL 出土層準とするグループ 4 の年代よりも新しいため、除外した。

(11)——産地推定の分析事例が少ないため、理化学的な裏付けはないが、Ⅵ層段階では信州産と考えられる透明度の高い黒耀石が多用されている。

(12)——Ⅶ層段階においても愛鷹・箱根山麓の柏葉尾遺跡 BBⅢ下や、関東地方の荒野前遺跡第 3 文化層などでは、信州産黒耀石が高い割合でみとめられている。ただし、荒野前遺跡第 3 文化層では総数 1,067 点中、黒耀石は 232 点であり、黒耀石自体が客体的である。また、図 11 からあきらかなように、信州産黒耀石を主体とする柏葉尾遺跡 BBⅢ下のような遺跡は極めて稀であることを確認しておきたい。このように全体的には微量ではあるが、消費地で信州産黒耀石が用いられていることから、当該期の中部高地の状況は、前後の段階と比較して人類活動の痕跡が非常に乏しい状態と表現できる。

引用・参考文献

- 阿部 敬 2013. 「旧石器時代の年代と広域編年対比—中部—」『旧石器時代の年代と広域編年対比』日本旧石器学会第 11 回講演・研究発表シンポジウム予稿集, pp.65-68, 日本旧石器学会.
- 安森政雄 1986. 「先土器時代の石器と地域」『岩波講座日本考古学』5, pp.28-60, 岩波書店.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 1995. 「南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ^{14}C 年代」『第四紀研究』34, pp.377-379, 第四紀学会.
- 池谷信之 2009. 「旧石器時代における陥穴珎と石材獲得・石器製作行動—愛鷹・箱根山麓 BBⅢ層期を中心として—」『駿台史学』135, pp.71-90, 駿台史学会.
- 池谷信之・望月明彦 1998. 「愛鷹山麓における石材組成の変遷」『静岡県考古学研究』30, pp.21-44, 静岡県考古学会.
- 大塚宣明 2009. 「「茂呂系」ナイフ形石器の出現をめぐる研究の現状と課題」『石器文化研究』15, pp.7-16, 石器文化研究会.
- 大塚宣明 2011. 「東林跡Ⅶ層石器群における剥片剥離技術の検討」『鎌ヶ谷市史研究』24 号, pp.22-46 鎌ヶ谷市教育委員会.
- 大塚宣明 2014. 「ナイフ形石器の出現」『季刊考古学』126, pp.65-68, 雄山閣.
- OTSUKA Yoshiaki, AMBIRU Masao 2010. The Beginning of the Upper Paleolithic in the Japanese Archipelago, The 15th International Symposium: SUYANGGAE and Her Neighbours, Institute of Korean Prehistory, pp.257-265
- 小野 昭 2011. 「日本における旧石器時代研究の枠組みと現状」『Anthropological Science (Japanese Series)』119 (1), pp.1-8, 日本人類学会.
- 織笠明子 2010. 「東林跡遺跡」『鎌ヶ谷市史』資料編Ⅰ(考古), pp.18-93, 鎌ヶ谷市教育委員会.
- 鎌ヶ谷市教育委員会 2010. 『鎌ヶ谷市史』資料編Ⅰ(考古).

-
- 君津郡市文化財センター 2005.『首都圏中央連絡道（木更津～東金）埋蔵文化財調査報告書2』.
- 工藤雄一郎 2012.『旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学』, 新泉社.
- 国分寺市遺跡調査会 2003.『多摩蘭坂遺跡Ⅳ—東京建物株式会社共同住宅建設に伴う事前調査—』.
- 小菅将夫 1991.「ナイフ形石器の変遷」『石器文化研究』3, pp.75-84, 石器文化研究会.
- 笹原芳郎 1995.「第2期・第3期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』, pp.22-27, 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会.
- 笹原芳郎 2005.「愛鷹・箱根旧石器時代編年の現状と課題」『地域と文化の考古学Ⅰ』, pp.91-106, 明治大学考古学研究室.
- 佐藤宏之 1992.『日本旧石器文化の構造と進化』, 柏書房.
- 佐藤宏之 2002.「日本列島旧石器時代の陥し穴痕」『国立民族学博物館調査報告』33, pp.83-108, 国立民族学博物館.
- 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
1995.『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』.
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010.『富士石遺跡Ⅰ 第二東名No.142 地点 旧石器時代（AT下位）編—第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』.
- 島田和高 2009.「黒耀石利用のバイオニア期と日本列島人類文化の起源」『駿台史学』135, pp.51-70, 駿台史学会.
- 杉原重夫・鈴木尚史・藤森靖枝・宇井義典
2005.「南三里塚宮原遺跡出土旧石器時代黒耀石遺物の産地推定」『印旛郡市文化財センター年報』21, pp.43-53, (財)印旛郡市文化財センター.
- 鈴木遺跡刊行会 1978.『鈴木遺跡Ⅰ』.
- 須藤隆司 2006.「中部地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』, pp.103-140, 同成社.
- 諏訪問 順 2006.「旧石器時代の最古を考える—「X層」研究の意義」『岩宿時代はどこまで遡るか—立川ローム最下層の石器群』, pp.2-12, 岩宿フォーラム実行委員会.
- 世田谷区教育委員会 2001.『堂ヶ谷戸遺跡Ⅴ—東京都世田谷区岡本3丁目1番の発掘調査記録—』.
- 石器文化研究会 1991.『石器文化研究』3.
- 高尾好之 1995.「第1期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』, pp.19-21, 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会.
- 高尾好之 2006.「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』, pp.61-102, 同成社.
- 千葉県教育振興財団 2009.『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書2—柏市原山遺跡—旧石器時代編』.
- 千葉県教育振興財団 2011a.『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXⅢ—印西市泉北側第3遺跡（下層）—』.
- 千葉県教育振興財団 2011b.『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書3—柏市農協前遺跡—旧石器時代編』.
- 千葉県教育振興財団 2011c.『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書—流山市大久保遺跡（下層）・市野谷向山遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡』.
- 千葉県教育振興財団 2012.『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXⅤ—印西市荒野前遺跡（下層）—』.
- 千葉県文化財センター 1986.『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—元割・聖人塚・中山新田Ⅰ—』.
- 千葉県文化財センター 1994.『千原台ニュータウンⅦ—草刈六之台遺跡—』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a.『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15—信濃町内 その1—日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡, 大平B遺跡 旧石器時代編』.
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b.『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15—信濃町内 その1—裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡 旧石器時代編』.
- 長野県埋蔵文化財センター 2000c.『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16—信濃町内 その2—信濃データベース編』.
- 中村雄紀 2011a.「静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷」『東京大学考古学研究室研究紀要』25, pp.1-32.
- 中村雄紀 2011b.「愛鷹山麓最古の石器群の諸問題：第Ⅶ黒色帯付近の石器群」『石器文化研究』17, pp.76-94, 石器文化研究会.
- 中村雄紀 2012.「愛鷹・箱根山麓の後期旧石器時代前半期前葉の石器群の編年」『旧石器研究』8, pp.105-122, 日本旧石器学会.
- 中村雄紀 2013.「旧石器時代の年代と広域編年対比—関東—」『旧石器時代の年代と広域編年対比』日本旧石器学
-

-
- 会第 11 回講演・研究発表シンポジウム予稿集, pp.61-64, 日本旧石器学会.
- 中村雄紀 2014.「関東地方における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』10, pp.107-127, 日本旧石器学会.
- 長門町教育委員会 2001.『県道男女倉長門線改良工事に伴う発掘調査報告書—鷹山遺跡群第 I 遺跡および追分遺跡群発掘調査—』.
- 沼津市教育委員会 1988.『土手上・中見代第 II 遺跡・第 III 遺跡発掘調査報告書』.
- 沼津市教育委員会 1989.『中見代第 I 遺跡調査報告書 (足鷹尾上 No.5 遺跡)』.
- 沼津市教育委員会 1990.『清水柳北遺跡発掘調査報告書 その 2—東尾根の先土器・縄文・古墳・奈良時代の調査—
—中央尾根の先土器・縄文・古墳時代の調査—』.
- 沼津市教育委員会 1991.『広合遺跡 (e 区)・二ツ洞遺跡 (a 区) 発掘調査報告書』.
- 沼津市教育委員会 2011.『井出丸山遺跡発掘調査報告書』.
- 原村教育委員会 1988.『弓振日向遺跡 (第 2 次発掘調査)—昭和 61 年度県営ほ場整備事業弓振地区に伴う緊急発掘調査報告書—』.
- 比田井民子・杉原重夫・金成太郎 2012.「武蔵野台地における立川ローム層最下層出土の黒曜石資料の原産地推定—
武蔵台遺跡・多摩蘭坂遺跡・鎌ヶ谷遺跡について—」『明治大学博物館研究報告』17, pp.39-56, 明治
大学博物館.
- 町田 洋 2005.「日本旧石器時代の編年」『旧石器研究』1, pp.7-16, 日本旧石器学会.
- 三島市教育委員会 1992.『三島市埋蔵文化財発掘調査報告 I』.
- 三島市教育委員会 1999.『静岡県三島市 初音ヶ原遺跡—都市計画道路谷田幸原線初音ヶ原インターチェンジ建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』.
- 三芳町教育委員会 2011.『中東遺跡第 2 地点・第 3 地点—倉庫増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』.
- 森先一貴 2010.『旧石器社会の構造的変化と地域適応』, 六一書房.

(国立歴史民俗博物館機関研究員)

(2014 年 1 月 22 日受付, 2015 年 1 月 26 日審査終了)

The Regionalization in Production Technique of Backed-knives from the Central Japanese Archipelago and Their Background

OTSUKA Yoshiaki

This paper discusses the regionalization observed in the lithic assemblages discovered below the AT volcanic ash and its background by examining the production techniques of backed-knives and the utilization of raw materials in the central Japanese archipelago (the Ashitaka/Hakone submontane area, the Kanto area, and the Chubu highland).

Firstly, the lithic assemblages discovered below the AT volcanic ash in the Ashitaka/Hakone submontane area were categorized into four groups according to the technological characteristics of backed-knives and the stratigraphic data. Considering the size variety, the retouching techniques, and the blank for backed-knives, these four groups are interpreted as four different chronological phases.

Secondly, the lithic assemblages from the Chubu highland and the Kanto area were examined in accordance with the production techniques of backed-knives, the ¹⁴C data, and the AT volcanic ash. They were then compared with four assemblage groups from the Ashitaka/Hakone submontane area chronologically. The examination resulted in establishing the chronology of lithic assemblages discovered below the AT volcanic ash (phases of Layer X-VI) in the central Japanese archipelago. The established chronology shows the presence of lithic assemblages from the phase of Layer IX in all areas and the absence of assemblages from the phases of Layer X and VII in the Chubu highland. It therefore reveals that the production techniques of backed-knives seen in the Ashitaka/Hakone submontane area during the phase of Layer VI are different from that of the Chubu highland and the Kanto area.

Thirdly, the transitions in the use of obsidian sources for each lithic assemblage were examined in order to discuss some possible interactions between each region. As a result, the relationship between the Chubu highland as the supply center of the Shinshu-originated obsidian and the rest of the regions as its consumers was identified, which leads to understanding both differences and similarities in the production techniques of backed-knives in each region.

Lastly, the transitions in the production techniques of backed-knives and the material utilization were examined comprehensively. As a result, it was revealed that the lithic assemblages from the phase of Layer VII show the consumption of local materials, while the assemblages from the phase of Layer VI present the regionalization in the production techniques of backed-knives. These phases are

one chronological phase away from each other, and this temporal gap is interpreted as the process of regionalization in the production techniques of backed-knives that derives from the consumption of local lithic materials.

Key words: central Japanese archipelago, lithic assemblages discovered below the AT volcanic ash, production techniques of backed-knives, material utilization, regionalization